



●編集委員会

〈委員長〉

松本哲郎（市原市立中央図書館）

〈委員〉

青柳英治（明治大学文学部）

岩永知子（相模原市立図書館）

宇野亮一（国立国会図書館）

中村保彦（元文教大学図書館）

長谷川優子（元埼玉県立図書館）

宮原柔太郎（日本体育大学図書館）

米山 薫（多摩市立図書館）

＊

●事務局スタッフ

秦 秀文・川下美佐子・星川智隆

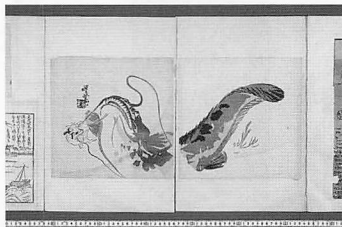
●今月の表紙

東京大学総合図書館所蔵『石本コレクション』

「鯉図と猫」（部分）

暁斎画

〈東京大学学術資産等アーカイブズポータル〉



VOL.117 NO.10 CONTENTS

窓●おもいこみ ————— 村上健治 620

こらむ図書館の自由●

学校図書館の検閲と多様性 ————— 鈴木啓子 623

●NEWS ————— 621

告知板 … 623／新聞切抜帳 … 625

＊

＊

＊

令和5年度(第109回) 全国図書館大会岩手大会への招待

全国図書館大会の全体紹介 ————— 627

第1分科会／“つながる図書館” ————— 628

第2分科会／オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方 — 629

第3分科会／学校図書館活動の活性化 ————— 630

第4分科会(1)／子どもと本のよい出会いを ————— 631

第4分科会(2)／読書が子どもに与える影響 ————— 632

第5分科会／日本の図書館情報学教育の現状：『日本の図書館情報学教育』

調査から ————— 633

第6分科会／令和3年改正著作権法の施行後の動向 ————— 634

第7分科会／戦争と図書館 ————— 635

第8分科会(1)／SDGsと図書館、誰も取り残さないインクルーシブな

図書館を目指して ————— 636

第8分科会(2)／最新のICT技術・アクセシブルな電子図書館を活用して

目指す、障害者の読書環境 ————— 637

第9分科会／日本図書館協会認定司書事業のこれまでとこれから — 638

第10分科会／災害と図書館 ————— 639

第11分科会／地方における書店の役割と図書館 ————— 640

第12分科会／暮らしの中の情報と多文化サービス ————— 641

第13分科会／指定管理者・委託で働く非正規雇用職員 ————— 642

第14分科会／住民が取り組む図書館職員問題 ————— 643

＊

＊

＊

第14期「認定司書」申請（更新申請を含む）を受け付けます

————— 日本図書館協会認定司書事業委員会 648

霞が関だより ● 第239回

- 令和4年度「読書活動推進事業」の取り組み事例について
 文部科学省 644
- 和歌山県内の取り組み－令和4年度「読書活動推進事業」子どもの読書に
 対するきっかけづくり 文部科学省 644

小規模図書館奮戦記 ● その305／プライドハウス東京 LGBTQ コミュニティ・
 アーカイブ & ライブラリー

- 「過去」を収集し、次世代へと継承する－LGBTQ コミュニティ・アーカイブ
 の構築をめざして 山縣真矢 652

図書館員の本棚 ●

- デジタルアーカイブの新展開 上岡真土 653

れふあれんす三題噺 ● 連載その三百五／山口県立山口図書館の巻

- 節目の年に、図書館のあれこれについて調べる。 井関和彦 654

ウチの図書館お宝紹介！ ● 第235回／公益社団法人日本山岳会図書室

- 日本で唯一の「山岳図書館」 神長幹雄 656

図書館員のおすすめ本 ● ⑧

- 監視カメラと閉鎖する共同体 新屋朝貴 658
- 自分をたいせつにする本 高橋和加 658
- 差し出し方の教室 村上恭子 659
- 文明開化に抵抗した男佐田介石 山下樹子 659

北から南から ●

- 「文献宇宙」の思潮を今に語り継ぐ－図書館学の祖と称されるピアス・
 バトラーのこと 天谷真彰 660

* * *

● *The Library Journal, October 2023*

- Invitation to the 109th All-Japan Library Conference 627-643

- 日図協図書館新着案内 662
- 協会通信 669
 事務局カレンダー 671
- 編集手帳 672

*「新館紹介」「声－各地の代議員から」
 は休載させていただきました。

- 図書館雑誌11月号予告 672

● 発行者

公益社団法人日本図書館協会 ©2023
 〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
 電話 (03)3523-0811 〈代表〉
 直通 (03)3523-0816 〈編集部〉
 F A X (03)3523-0841 〈代表〉
 〈日図協ホームページ URL〉
<https://www.jla.or.jp>
 〈JLA メールマガジン申込先アドレス〉
mailmaga@jla.or.jp

* 本文は中性紙（冷水抽出 pH8.1）を使用



おもいこみ

村上健治

図書館に就職して割と早い時期に日本図書館協会に入会した。図書館で働く人は誰もが入会するものだと思っていた。しかし、そうでもないことに気づくのにそれほど時間はかからなかった。

私が就職した頃、図書館とは静かに本を読んだり勉強したりするところだった。「静粛に」と書かれた紙があちこちに貼られていたことを覚えている。しかし十数年ほどするとPCが置かれるようになり、雰囲気が変わってきた。グループ学習室やラーニングコモンズが設置され、友達と相談しながら学習するということが当たり前におこなわれるようになった。依然として静かに勉強できるスペースが多くを占めているものの、さまざまな利用形態が共存する施設へと変化してきた。静粛にしなければならぬ、というのは私のおもいこみにすぎなかった。

大学の授業がない休日にも開館することは以前からおこなわれていた。その後、一定の制限はあるものの飲み物の持ち込み・利用ができるようになり、蔵書にマンガが取り入れられるようになった。電子ジャーナルのように紙ではないものを扱

うようになり、ウェブサイトを通じて広報するようになった。図書館とはこういうところ、という固定観念は覆され続けてきた。

図書館の中で仕事をしているとこのような変化を当たり前のように感じているが、図書館の外から見るとどうだろうか。まだまだこのような変化は見えていないのではないだろうか。個々の人が独自につくりあげてきたイメージは、なかなか変わらない。その印象を変えていくことは難しいが、変化していることを体験してもらえる機会を広げていくことは大切だと感じている。

これからも図書館は変わっていくだろう。図書館の役割をあまり決めつけ過ぎることなく、変化を柔軟に取り入れていくにはどうしたらいいだろうか。少なくとも現在の課題を知り、利用者の要望を調べ、他館の事例を広く知っていくことは欠かせない。日本図書館協会に入ったおかげで他の館種の動きを知ることができ、興味・関心を持つ機会が増えた。ここで得られたことは多い。自己正当化バイアスなのかもしれないが。

(むらかみ けんじ／広島大学図書館)

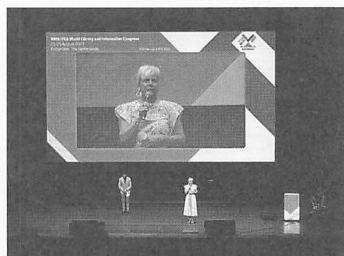
世界図書館情報会議 (WLIC) : 第88回国際図書館連盟 (IFLA) 年次大会終了

今年8月21～25日、オランダ第2の都市ロッテルダムで第88回 IFLA 年次大会が開催された。大会テーマは「ともに働こう、ともに図書館しよう」であった。21日の開会式に列席したローレンティン妃は、人びとの孤独の対極にある「ともにあること (togetherness)」を、図書館存在のキー概念として述べた。

参加者は、およそ100の国と地域から3,000人を超えた（一部のセッションを聴講できるオンライン参加者を含む）。約210のセッションや71の企業展示、ポスター発表197件（事前登録）などが行われた。8月22日には「文化のタベ」が実施され、1857年開園のブライドープ動物園が会場となり、参加者は思い思いに園内を散策した。

日本人の発表では、地域史・系図分科会 (LHG) 主催のプレ会議で長塚隆氏（鶴見大学名誉教授）が口頭発表したほか、会期中に LHR のセッション094で長谷川幸代氏（跡見学園

女子大学）と長塚氏による共同発表が、また、アジア・オセアニア地域活動部会のセッション096で野村美佐子氏（特定非営利活動法人支援技術開発機構）による発表が、それぞれ行われた。ポスター発表も、元木章博氏（鶴見大学）によるものなど3件（5名）があった。



▲開会式

開会式前日の夕刻には、日本人関係者による地域会議「日本コーカス」（セッション068）が実施された。約25名の日本人関係者が出席したほか、IFLA 事務局からステファン・ワイバー氏（政策・広報部門担当）らも参

加した。IFLA 理事の井上靖代氏（獨協大学）をはじめ3件の発表があり、出席したIFLA 分科会の各委員から、所属する分科会で討議されている課題について簡単な報告も行われた。

本大会の概要は、本誌12月号の小特集「IFLA ロッテルダム大会レポート」で改めてお伝えしたい。24日の閉会式では、ヴィッキー・マクドナルド新会長（オーストラリア・クイーンズランド州立図書館）ら新理事会も紹介された。来年の第89回 IFLA 年次大会はアラブ首長国連邦の中心都市ドバイでの開催が発表されている（ドバイ開催発表に先立ち、7月にIFLA 理事会から各会員にオンライン上での意見聴取の機会が設けられた。同国での人権の扱いをめぐる、開催反対の意見表明も少なくなかったが、最終的に理事会で開催が決められた）。

（三浦太郎：JLA 国際交流事業委員会委員長、明治大学）

▶ 図書館関係地方交付税についての要望書を提出

日本図書館協会は、8月1日付で文部科学大臣宛に「令和6（2024）年度予算における図書館関係地方交付税について（要望）」を送付した。あわせて、担当課長に説明を行った。また、総務大臣、図書館議員連盟会長、学校図書館議員連盟会長宛にも送付した。

要望書では、「会計年度任用職員の適正な任用等について」をはじめ、「デジタルによる図書館の環境整備の充実について」、「公立図書館関係経費の改善」として、(1)地方交付税

における基準財政需要額の充実、(2)公立図書館への正規の専門職員の配置、(3)図書館協議会経費の充実、(4)図書館への指定監理者制度の導入の是正、(5)視覚障害者等の読書環境の整備の推進に係る経費の新設、を、「学校図書館関係費の改善」として、(1)学校図書館図書費の措置、(2)特別支援学校の学校図書館の整備、(3)学校司書配置の改善、を要望した。

▶ 日本図書館協会目録委員会、「目録の作成と提供に関する調査」のウェブページを公開

2023年8月18日、日本図書館協会

目録委員会が、「目録の作成と提供に関する調査」のウェブページを公開した。

JLA では1964年以降6回にわたり、国内の公共図書館・大学図書館等を対象として、目録の作成や提供に関する調査を行ってきたが、調査の名称や調査主体は回によって異なるとして、ウェブページでは、過去の調査の情報を整理して示すとともに、2010年実施の「目録の作成と提供に関する調査」の報告書（2012年刊行）の全文を公開している。

目録の作成と提供に関する調査 (JLA, 2023/8/18) : <http://www.jla>

or.jp/committees/mokuroku/tabid/1040/Default.aspx

▶「IFLA-UNESCO 公共図書館宣言2022」について

日本図書館協会国際交流事業委員会では5月、「ユネスコ公共図書館宣言2022」の日本語訳を公表し、『図書館雑誌』6月号(p.347-349)に掲載された。この邦訳タイトルは、1949年に宣言が出されて以来の名称を踏襲したものであったが、今回、本宣言の原タイトル「IFLA-UNESCO Public Library Manifesto 2022」の表記に鑑み、以降は「IFLA-UNESCO 公共図書館宣言2022」として周知を図っていくこととした。

・IFLA-UNESCO 公共図書館宣言2022

<https://www.jla.or.jp/library/gudeline/tabid/1018/Default.aspx>

▶「国立国会図書館オンライン」と「国立国会図書館サーチ」が統合・リニューアル予定

国立国会図書館は、「国立国会図書館サーチ」に「国立国会図書館オンライン」の機能、サービスを統合し、新たな「国立国会図書館サーチ」として、2024年1月にリニューアルすることを発表した。

現在、国立国会図書館サーチの障害者向け資料検索で提供されている「障害者向け資料検索サービス」は、試験公開されている「みなサーチ」(国立国会図書館障害者用資料検索)の正式版に引き継がれるという。

詳細：<https://www.ndl.go.jp/jp/use/2024renewal/index.html>

▶「ユネスコ学校図書館宣言」改訂について

2021年に国際図書館連盟(IFLA)学校図書館分科会がIFLA School Library Manifestoの暫定版を公表し、パブリックコメントを募集した

(https://www.ifla.org/wp-content/uploads/2019/05/assets/school-libraries-resource-centers/publications/ifla_school_manifesto_2021.pdf)。

これは、1999年に発表されたIFLA/UNESCO School Library Manifesto 1999の改訂を目指したもので、さらなる修正を経て、IFLA 理事会による承認を得たのち、UNESCOの正式承認を待つこととなった(修正版は現在未公開)。

UNESCOの内部調整のため、2年以上を経過しているが、この間、同分科会委員である庭井史絵氏(青山学院大学)による日本語訳の作成も進められた。

UNESCOの承認後、同分科会から日本語訳の公開について承認が得られれば、時期を経ずしてIFLA/UNESCO School Library Manifestoの日本語訳も公表を予定している。

▶2024年度国立国会図書館予算概算要求額まとまる

このほど国立国会図書館の2024年度予算の概算要求額が発表された。総額は203億4600万円で、2023年度当初予算額198億7400万円と比較すると、主に退職予定者の増加に伴う退職手当等の人件費の増により4億7200万円の増額となっている。

重点事項としては、以下の項目があげられている(金額かつこ内は2023年度予算)。

1. 所蔵資料のデジタル化の推進
4億6000万円(4億1000万円)
2. 国立国会図書館インターネット資料収集保存事業(WARP)のシステム更新
1億7400万円(0)

＊

主な要求内容は、次のとおり(下線の項目が重点事項)。

1. 国会サービス経費

2億7800万円

2. 資料費・デジタル化経費

25億2700万円

- (1) 所蔵資料のデジタル化の推進

4億6000万円

- (2) 資料費

20億6700万円

3. 情報システム経費

32億2400万円

- (1) サービス・業務統合システムの運用等

14億400万円

- (2) デジタル・アーカイブシステムの運用等

7億4100万円

国立国会図書館インターネット資料収集保存事業(WARP)のシステム更新等

- (3) その他(サービス基盤ネットワークシステムの運用、データ入力経費等)

10億7900万円

4. 図書館業務経費

19億1000万円

5. 国際子ども図書館業務経費

2億6200万円

6. 関西館業務経費

9億2400万円

7. 人件費

101億6600万円

8. 施設整備に必要な経費

10億5300万円

- (1) 東京本館庁舎整備

9億4700万円

- (2) 関西館庁舎整備

1億600万円

▶Library of the Year 2023の優秀賞・ライブラリアンシップ賞・特別賞の受賞機関が発表

NPO法人知的資源イニシアティブ(IRI)は、8月23日に実施したLibrary of the Year 2023(LoY2023)の二次選考会の結果を発表した。二次選考会の結果、ライブラリアンシップ賞、優秀賞、特別賞を受賞した機関は以下のとおり。

<Library of the Year 2023 ライブラリアンシップ賞>

- ・国立国会図書館デジタルコレクション
- ・東京・学校図書館スタンプラリー

◆ NEWS ◆

<Library of the Year 2023 優秀賞>

- ・高知こどもの図書館
- ・雑誌『ライブラリー・リソース・ガイド』(LRG)
- ・東京学芸大学附属図書館とExplayground推進機構MOL
- ・みんなの図書館さんかく

<Library of the Year 2023 特別賞>

- ・都道府県立図書館サミット

詳細: <https://www.iri-net.org/loy/loy2023-second-result/>

▶ 告知板 ◀

● つどい

■ 第32回京都図書館大会

テーマ: デジタル社会と図書館～電子書籍サービスから考える～

電子書籍サービスを視座に、それぞれの館種等の立場から、「デジタル社会と図書館」のいまとこれからについて考えます。

主催: 京都図書館大会実行委員会

共催: 京都府立図書館、京都府立京都学・歴彩館

日時: 11月20日(月) 10:20-16:30

会場: 京都府立京都学・歴彩館 大ホール ※終了後、会場の録画映像を後日配信いたします。申込者は一定期間視聴できます。

内容: 基調講演1: 本と書店と図書館のミライ(池内淳: 筑波大学)、事例発表1: 市町村と県による協働電子図書館「デジとしょ信州」の運営について～選書を中心に～(棟田聖子: 松川村図書館)、事例発表2: ふくちやま電子図書館について(山路智子: 福知山市立図書館)、事例発表3: 電子書籍利用促進企画「学芸本ガチャ!」について(真家美咲: 東京学芸大学)

参加対象: 公共図書館、大学図書館、

こらむ 図書館の 自由

学校図書館の検閲と多様性

鈴木啓子

2023年春、アメリカの学校からLGBTQや黒人差別の本が消えるというニュースが流れた。

コロナ禍でマスクやワクチンの義務化などに反対した保守派の人たちが、学校に目を向けるようになり、保守的な考えに反する内容の本を学校図書館から排除するよう要望している。それに政治家も後押しして、性の多様性について教えることを制限する法律も各地で制定されているようだ。

このニュースの中で禁書について議論する「禁書クラブ」を立ち上げたある高校生は、「LGBTQや黒人差別などのテーマを知らずに育つと、非常に無知で無教養な人になってしまうと思います」と発言している。禁書の動きに対して、アメリカ図書館協会(ALA)は、検閲の実施に反対する声明を出している。

日本の学校図書館でも校長が選書にクレームをつけた「愛知県立高校図書館における選書への介入」(1981年)や島根県松江市教育委員会が市立小中学校に閲覧制限を求めた「『はだしのゲン』学校図書館の閲覧制限」(2013年)などがあった。「図書館の自由に関する宣言」の解説書(第3版)には、「子どもの読む自由を保障しながら、彼らが日常的にすぐれた資料・情報と出会うことのできる環境をつくること」を通じて、「子どもの時期から情報・資料の選択能力(情報リテラシー)を高めるよう、すべての図書館は支援していかなければならない」とある。

学校図書館は、子どもたちが多様な価値観と身近に出会える場である。H. ライヒマンは『学校図書館の検閲と選択』(青木書店、1993)で、「検閲は多様性を抑圧しようとする」と述べている。学校図書館に豊富で多様な資料があることは、子どもたちが興味関心や疑問をもち、思考することにつながる。つまり、学校教育に必要なメディア・情報リテラシー教育を行うためにこのような資料を提供することは、学校図書館の務めである。そのためには、LGBTQや人種問題も含めた多様な資料へのアクセスが保障されるべきである。「図書館の自由」は、学校図書館だからこそ重要であると言える。

(すずき けいこ: JLA 図書館の自由委員会)

学校図書館及び専門図書館の職員、学校教職員、日本図書館協会会員、利用者および利用団体等
参加費: 無料

申込方法: 以下のURLの申込フォームより <https://www.library.pref.kyoto.jp/council/libconf/32/>

申込締切: 2023年11月10日(金)

問合先: 〒606-8343 京都市左京区岡崎成勝寺町 京都府立図書館内 京都図書館大会実行委員会事務局 (☎075-762-4655 FAX.075-762-4653 E-mail: tosyokan-service@pref.kyoto.lg.jp)

■認知症図書館バリアフリー研修会 八王子市立図書館の認知症にやさしい図書館の取組と「認知症バリアフリーの手引き 図書館編」の説明

日時：11月20日(月) 14:00-17:00

会場：八王子市中央図書館

講師：太田幸彦（八王子市中央図書館）、守谷卓也（DAYS BLG!はちおうじ）、菊地志保（八王子市高齢者あんしん相談センター追分）
コーディネータ：田村俊作（石川県立図書館長・認知症バリアフリー図書館特別検討チーム）

内容：市内の各機関・団体が連携し、図書館サービスの充実を図る取り組みを行っている八王子市立図書館の活動を報告する。また、日本認知症官民協議会から刊行された「認知症バリアフリーの手引き 図書館編」について認知症バリアフリー図書館特別検討チームより説明を行う。

開催形式：現地会場およびZoomによるオンライン開催

定員：30名（会場）、60名（オンライン）

参加費：1,000円

申込方法：委員会 HP 内にある「申込フォーム」にて

申込締切：11月6日(月) ※定員に達し次第締切

詳細：日本図書館協会認知症バリアフリー図書館特別検討チーム HP：
<https://www.jla.or.jp/committees//tabid/902/Default.aspx>

問合せ先：認知症バリアフリー図書館特別検討チーム E-mail: djla@jla.or.jp

■東京都立中央図書館「東京文化財ウィーク2023」参加企画展 描かれた江戸城

「描かれた」という視点から、特別

文庫室所蔵資料により幕府の行事や江戸城について紹介します。

会期：10月28日(土)～11月12日(日)

まで ※11月2日(木)は休館日
開催時間：10:00-20:45（土・日・祝日は17:30まで）

会場：東京都立中央図書館 企画展示室・多目的ホール（4階）（東京都港区南麻布5-7-13 有栖川宮記念公園内）

展示内容：第一会場（企画展示室）
第1章「江戸城の天守」：城のシンボルである天守について重要文化財「江戸城造営関係資料」等で紹介、第2章「浮世絵でみる江戸幕府の行事・儀式」：明治時代に楊洲周延によって描かれた浮世絵のシリーズ「千代田之御表」等で、江戸幕府の行事や儀式紹介、第3章「名所としての江戸城」：「名所」としての江戸城が描かれた浮世絵や名所記等を展示／第二会場（多目的ホール）チャレンジ！江戸城クイズ：江戸城に関するクイズを開催します。クイズに回答された方全員に、記念品をプレゼント！

問合せ先：東京都立中央図書館サービス部情報サービス課 ☎03-3442-8451 湯地（内線1501）、長谷川・溝田（内線5312）

●その他

◆2023年度世界アルツハイマーデー、世界アルツハイマー月間の図書館の取り組みについて

9月21日の世界アルツハイマーデー・9月の世界アルツハイマー月間にあたり、厚生労働省から、普及・啓発イベントに関する情報提供が呼びかけられています。日本図書館協会認知症バリアフリー図書館特別検討チームでは、今年も図書館の認知症に関する取り組み事例を募集

します。

今回は世界アルツハイマーデー・世界アルツハイマー月間に関するもの（日程が前後しても構いません）とそれ以外の2023（令和5）年度の取り組みにつきましても募集します。

ぜひ、情報をお寄せくださいますようお願いいたします。

詳細：<https://www.jla.or.jp/committees//tabid/902/Default.aspx>

◆日本図書館協会資料保存委員会『ネットワーク資料保存』No.132を掲載

資料保存委員会は、『ネットワーク資料保存』No.132を当協会 HP に掲載した。内容は以下の通り。

西洋古典籍の調査と保存への取り組みについて（日本大学図書館・瀬戸口千代）、〈参加報告〉日本大学図書館法学部分館見学記（鞭馬裕次郎）、世界に誇る日本の手漉き和紙を守りたいー手漉き和紙に必要な不可欠なトロロアオイを家庭で育てる『わしのねりプロジェクト』（企画屋かざあな）、みんなで資料保存を考えるー報告書『資料を護り、未来の利用者へ残すためにー資料の共同保存と除籍を考えるー』の発行について（工藤嘉一）、コラム「装訂？装幀？装釘？装丁？」（眞野節雄）

『ネットワーク資料保存』No.132：
<https://www.jla.or.jp/Portals/0/data/iinkai/hozon/network/NW132.pdf>

資料保存委員会のページ：<http://www.jla.or.jp/committees/hozon/tabid/96/Default.aspx>

◆9月号「新館紹介」お詫びと訂正
p.565 右段 香美市立図書館
（誤）延床面積 4.195㎡
（正）延床面積 1.653㎡

関係者各位にご迷惑をおかけしたことをお詫びし、訂正いたします。

NEWS

新聞切抜帳

●全国

▶247万点テキストデータ提供 国立国会図書館 視覚障害者向け図書や雑誌 提供件数、一挙に拡大「当事者の世界広がる」(京都6/24)

▶[国立]国会図書館「デジタル化資料送信」の問題点 絶版などで入手困難な資料対象 個人にも拡充 閲覧・複製が可能 図書館／個人向け送信 各184万点が対象 著作権保護期間内の書籍も送信対象 古書市場からの入手無視 著者・出版社の機会損失は膨大 複製・公衆送信はどこまで妥当か「送信範囲は著作権期間切れに限定を」公共図書館の貸出冊数 販売数25%上回る 寄稿 JPCA 代表理事／緑風出版代表 高須次郎(新文化7/13)

▶[くらし]学校[図書館]図書費 計画の6割弱 21年度 自治体裁量 別用途に(山陰中央新報7/29)

▶[データで読む 地域再生]図書館増、活性化の核に ツアー企画や起業支援 高知[県]の施設「オーテピア」、年100万人来館 [高知県・梶原町立図書館、鳥取県立図書館、三条市「まちやま」](日経8/5)

▶[顔 Sunday]学校図書館賞を受賞した 勝山万里子さん64 貸出冊数10倍 生徒に変化 [全国学校図書館協議会](読売8/6)

▶学校図書館法 公布70年の式典(読売8/9)

▶図書館の人気本所蔵 どこまで 自民[党]議[員]連[盟]「書店支援」提言 国が議論へ／蔵書購入ルール必要？ 自民[党]議[員]連[盟]「人気のある本に偏重」図書館「予算減り過剰複本無理」(朝日8/28)

●北海道・東北

▶[データで読む 地域再生]滝川市[立図書館]、情報発信に力 寄贈本

保育園などへ配布も [北海]道内図書館利用拡大へ 様似町[町立様似図書館] 司書、小中学校で読書促す [浦河町立図書館]

(日経[北海道]8/5)

▶[データで読む 地域再生]「らしくない図書館」人集う 貸出冊数増加率、東北上位に 岩手[県]・紫波町[図書館] 楽しむ場、全国が注目 [つがる市立図書館、多賀城市立図書館](日経[東北]8/5)

▶新図書館蔵書30万冊 登米市構想、現在の2.5倍に 複合施設化 新築か改装か検討

(河北新報7/5, 関連2紙)

▶画面に触れず蔵書検索 由利本荘市中央図書館 熊本の企業[ミライバー]が開発、端末寄贈

(秋田魁新報6/30)

▶和賀組グループを選定 湯沢市 湯沢駅周辺複合施設 DBO [図書館など](日刊建設工業7/21)

▶子育て支援施設×図書館 長井[市]きょうプレオープン [「くるんと」](読売[山形]8/11)

▶18日「ひのき薬局」新装オープン 図書館併設、交流の場に [会津]若松市(福島民報7/8)

▶二本松[市]のブックステップ事業 幼児に絵本を贈呈 岩代[図書館]で贈呈式

(福島民報[福島・県北]7/16)

▶猛暑乗り切れ [福島]県内総力戦 一時休憩所に市民続々 [「クーリングシェルター」 図書館などを開放 福島市、郡山市、いわき市など](福島民報7/27)

▶「フクニチャージ」表示 福島大[学] 付属図書館の命名権 [福島]産自動車(福島民友8/4)

●関東

▶[百里]飛行場前は交流拠点 [JR]羽鳥駅前に公共施設[図書館など]集約 小美玉市(建設通信6/16)

▶[学びの現場 @群馬] 図書予算自治体で開き 小学校4.6倍、中学

校3倍 蔵書数全国上回る [群馬]県(読売[群馬]8/4)

▶新施設建設後の行方は [千葉]県立中央図書館 専門家「貴重な文化資産」「群造形」実践の場 都市計画に足跡残す(千葉日報7/14)

▶新[千葉]県立図書館に蔵書集約 基本設計発表 防災機能も強化 29年度開館へ(読売[千葉]8/15)

▶24年度組合設立、26年度着工へ [JR]福生駅西口再開発 スケジュール見直し [福生市 図書館など](日刊建設工業7/14)

▶夏の読書 共感力を豊かに [東京]都立図書館名誉館長・尾木直樹さん 普段読めない古典や大作に挑戦を 児童・生徒の不読率18.5%[東京都教育委員会調査](朝日[多摩]8/13)

▶福祉会館など集約へ [JR]東逗子駅前 [逗子]市、複合施設[図書館分室など]を新設(神奈川7/1)

▶スターツグループを特定 三浦市の庁舎など交流拠点 市役所は約7千㎡ [図書館など](建設通信7/7, 関連1紙)

▶街の本屋さんに「学校図書室」 川崎[市]・北野書店が5千冊 忙しい教員の本選びサポート [「らいおん図書館」](朝日7/18)

▶不登校にさせない高校図書館 湘南工科大[学]付[属]高校図書館「HABITAT」 生徒発案、SDGs 協賛企業賞 他人と比べられず／人と接点は持てて／教室・部活でもない 新たな「居場所」(朝日[神奈川]7/24)

●甲信越・北陸

▶[データで読む 地域再生]長野[県]、全市町村で電子書籍[「デジとしよ信州」] 北信越の図書館、独自性で利用促進 新潟県長岡市 産業振興の拠点に[互尊文庫] [県立長野図書館、鯖江市図書館、福井県立図書館、石川県立図書館](日経[北陸]8/5)

▶弥彦[村]新図書館[「らいわ弥彦」]

オープン 役場敷地内 蔵書1万8000冊 独自の分類で配置 工作室やカフェも [新潟県]

(新潟日報6/27)

▶[砺波市立]砺波図書館 [来館者]50万人達成 20年11月開館 上妻さん親子に花束 (北陸中日7/23)

▶開館1年で来館102万人 旧館の4倍 [石川]県立図書館 昨年度・全国首位ならず「会話OK」を評価 岡山[県立図書館]と1万8000人差 調べもの相談強化

(北国7/19, 関連1紙)

▶1万6000冊を音声で 視覚障害者対象に電子図書館 利用受け付け始まる [長野市立長野図書館, 県立長野図書館, 坂城町立図書館「アクセシブルライブラリー」]

(長野市民7/6)

●東海

▶[データで読む 地域再生]学習席 ネット事前予約へ 名古屋[市]の鶴舞中央図書館 利便性高め人呼ぶ [名古屋]市立[図書館]誕生100周年で企画も [岐阜市立中央図書館, 静岡市立中央図書館, 静岡県立中央図書館, 浜松市立城北図書館, 伊勢市立図書館]

(日経<中部>8/5)

▶週刊誌が実名報道 閲覧対応分かれる [岐阜]県内の公立図書館 [閲覧当面見合わせ: 高山市, 発売日の配架は見送り: 大垣市, 23日から配架: 岐阜県図書館, 22日夜から配架: 岐阜市]

(岐阜6/23)

▶[カニミライブ図書館] よろしく

可見市立図書館分館の名称発表

(中日8/24)

▶おすすめ絵本 AIが探すよ 磐田[市]の子育て支援施設[ひと・ほんの庭にこっと], 図書館に導入 [「ぴたりエタッチ」]

(朝日<静岡>7/28)

▶伊東[市]新図書館着工できず 業者辞退・予定価格超過で入札不調 資材・人件費の高騰響く

(朝日<静岡>8/23, 関連1紙)

●関西

▶[データで読む 地域再生]関西の図書館, 人呼ぶ拠点 和歌山市[民図書館] ヨガ教室や演奏会 奈良市[奈良県立図書情報館] [ホテル日航奈良]宿泊客に貸し出し [守山市立図書館]

(日経<近畿>8/5)

▶湖南省 石部文化[総合]センター 撤去へ [石部]図書館など廃止で 耐用年数27年残し

(京都<滋賀>8/29)

▶新たな図書館とラーニングコモンズ開設 大阪工業大学[大宮キャンパス] 記念イベントを開催

(教育学術7/19)

●中国・四国

▶[データで読む 地域再生]中四国の図書館, サービス向上 鳥取[県立図書館], 起業成功導く 岡山[県立図書館], 分野ごとに専門司書 [オーテピア高知図書館]

(日経<中国>8/5)

▶“図書”への思い詠む 鳥取短[期]大[学]生が句集製作 倉吉市 [「図書館制度・経営論」受講生『とりたん芸芸 図書館を詠む』]

(日本海8/8)

▶小学校や公民館入居 益田[市]・真砂[地区]に[市立地域活性化]交流館 住民, 児童ら完工式 [小学校の図書館機能など]

(山陰中央新報8/6)

▶多世代集う複合施設に [JR]岩国駅西口 図書館の機能軸 [岩国]市が基本設計 (中国<山口>8/8)

▶祝来館者50万人突破 美馬市立図書館で記念式典 (徳島7/14)

▶[吉野川市立]鴨島図書館で調べ学習を 小中[学]生の探究心養成 [図書館を使った調べる学習]コンクール初開催 テーマ自由「積極的に応募して」 (徳島7/21)

▶コロナで利用減 徳島市立図書館 貸し出し数回復鈍く そごう撤退 影響残る (徳島7/23)

▶コロナ下外出控え追い風 電子図書館利用急増 [徳島]県内4自治体 [徳島県, 徳島市, 阿南市, 三好市] 運営 使用期限や閲覧上限 蔵書の拡充課題 (徳島8/1)

▶市民会館解体後の跡地 阿南市, 新図書館建設へ 15日から意見公募 (徳島8/6)

▶誰でもどうぞの学校図書館 [愛媛県]上島[町]・弓削商船高[等]専[門]学校 4月に新装 町唯一施設 蔵書7万5000冊「魅力知って」交流会も (愛媛6/30)

▶電子書籍「キノデン」導入 [オーテピア]高知図書館が3種類目 (日経<四国>7/22)

●九州・沖縄

▶[データで読む 地域再生]住民が「おはなし会」 図書館, 活性化の中核に 長崎[県]・五島[市]立図書館, 3ヵ月で[貸出利用人数]1万人 市民交流促す例も 九州・沖縄 貸出冊数, 佐賀県がトップ [長崎市立図書館, ミライ on 図書館, 武雄市図書館]

(日経<九州>8/5)

▶カヤックで基本計画 八女市立図書館本館 (日刊建設工業6/19)

▶みやま市立与田準一記念館 来館者が10万人突破 瀬高小[学校]児童らに記念品 [みやま市立図書館内] (毎日6/24)

▶図書館活用認知症カフェ 筑後[市]立図書館 身近な施設 気軽に参加 読み聞かせやストレッチ [「図書館で認知症かふえ」] (読売8/2)

▶[きりしま]開業6年, コロナ越え回復 都城市立図書館 来館500万人 (宮崎日日8/23)

今月も阿部千春様, 石井一郎様, 鎌田梨奈様, 岸本修様, 桑原芳哉様, 梅野みな様, 野口敬太郎様, 松野高德様 および富山県図書館協会, 山梨県立図書館, 県立長野図書館, 小郡市立図書館, 筑後市立図書館の皆様より記事の提供を受けました。ありがとうございました。

令和5年度(第109回) 全国図書館大会岩手大会への招待

テーマ=理想郷“イーハトーブ”で本当の幸せを考えるー希望ある未来は図書館とともにー

とき=2023年11月16日(木)～17日(金)

ところ=盛岡地域交流センター(マリオス)、いわて県民情報交流センター(アイーナ)

〈はじめに〉

第109回全国図書館大会岩手大会の開催まであとわずかとなってきました。今回の大会は、109回にして初めて岩手県での開催となります。また、2020(令和2)年から昨年までの3年間はオンライン開催でしたが、4年ぶりの対面形式での開催となります。予算も人員も限られた中、大会に携わるすべての方々とともに、希望ある未来に向けた図書館大会にしていきたいと思います。

〈大会テーマ〉

テーマは、「理想郷“イーハトーブ”で本当の幸せを考えるー希望ある未来は図書館とともにー」としました。

大和朝廷の時代、東山道の奥にあった辺境の地域は、今では風情豊かに「みちのく」と呼ばれることがあります。その一角を成す岩手県は、郷土を代表する詩人・童話作家 宮沢賢治(1896-1933)の心象世界の中にある「理想郷イーハトーブ」のモチーフと言われています。賢治の思想の根底には「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」との考えが流れており、混んとする現代社会に生きる私たちが、最も人間らしい行為の一つとされる読書やその場を提供する身近な図書館を通じ、希望ある未来に向けて本当の幸せとは何かに思いを巡らす大会にしたいと考えています。

本県では、2011(平成23)年に発生した東日本大震災津波からの復興等に向け取り組んでいます。人は誰もが幸せになるために生まれてくるのだと思いますが、生きていく上では乗り越えていかなければならない出来事に遭遇することがあります。そんな時、読書や図書館は、必ずや私たちに生きる力(課題解決のための知識や情報)を与えてくれるはずです。

〈記念講演〉

岩手県奥州市にある国立天文台水沢 VLBI 観測所は、1899(明治32)年に開設され、大正時代には童話作家・宮沢賢治も訪問し、宇宙を題材にした賢治の作品群に影響を与えました。

また、2019(令和元)年には、同天文台の研究者を含む国際プロジェクトがブラックホールの写真撮影に成功するなど、天文学の最先端研究を岩手の地で現在も進めています。

記念講演では、所長／教授の^{ほんままれき}本間希樹氏から「岩手発 ブラックホール行き 銀河鉄道の旅」と題して、天文台の歴史や宮沢賢治とのつながり、ブラックホールの撮影成功など最先端の天文学研究のほか、研究者から見た図書館の重要性と今後の期待について、御講演をいただきます。

〈展示会・関連企画〉

第2日目は、アイーナ及びマリオスにおいて、14の分科会を開催するほかに、午前9時から午後5時30分まで、日本図書館協会、関係団体、委員会、岩手県の情報などの展示や協賛企業の展示・物販を行います。ぜひお昼休み時間や分科会終了後にお立ち寄りください。

参加申込受付中(10月16日まで)です。お申し込みは、岩手大会ウェブサイト(<https://lib-iwate.com>)で承ります。皆様の御参加を心よりお待ちしております。

(佐藤一男^{さとうかずお}: 岩手県教育委員会教育長、

第109回全国図書館大会岩手大会実行委員長)

※ 令和5年度(第109回)全国図書館大会岩手大会への招待
p.627-643

[NDC10:010.6 BSH:全国図書館協会]

“つながる図書館”

—— 幸せと希望を実現する公共図書館の試み ——

地球規模の気候変動や社会のデジタル化が進む中、人口減少が進行し、格差による経済の衰退やコロナ禍からの活動停滞など課題が山積する現代社会において、人々が、適切な判断をするためには多様な観点から正確な情報が継続的に得られる公共図書館の存在がきわめて重要である。

本分科会では、岩手県での、東日本大震災時に県と市町村が協力して課題解決に取り組んだ経験から、図書館における県と市町村のネットワーク構築について着目し、先進事例を基に図書館の今後の可能性を考えようとするものである。

基調講演では、小林隆志氏から、鳥取県における県立図書館と県内全域の図書館とのネットワーク構築や、県内サービスの仕組みづくりの考え方と実践についてお話いただく。

事例報告では、その鳥取県のネットワークを活用したサービスの実践を南部町立図書館から、東日本大震災を契機に構築された、岩手県の災害時の相互応援体制について洋野町立種市図書館から、また、人から人へ生きた情報が伝わる機会を創設し、まちとつながり、まちづくりに貢献する図書館の事例を豊橋市まちなか図書館から報告いただく。

さまざまな立場の皆さんからの報告とディスカッションを通し、また、DXなど時代に即応し、図書館相互や外部機関との連携も視野に入れ、公共図書館のネットワークの在り方を考えたい。

基調講演

小林 隆志（鳥取県立図書館 館長）

「図書館のネットワークが県民の幸せと希望を実現する」

事例報告

角田 有希子（南部町立図書館 館長）

「暮らしに寄りそう図書館～町民とともに～」

事例報告

平 留美子（洋野町立種市図書館 館長補佐）

「東日本大震災でのつながりについて」

事例報告

種田 滢（豊橋市まちなか図書館 館長）

「地域図書館の挑戦」

講演者、報告者によるディスカッション

「つながる図書館を実現するには」

司会 藤岡 宏章（前・岩手県立図書館 館長）

（伊藤佳子：盛岡市立図書館）

★第2分科会

大学・短大・高専図書館★

オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方

インドのS. R. ランガナタン (S. R. Ranganathan, 1892-1972) は著書『図書館学の五法則』にて第五法則「図書館は成長する有機体」と述べている。21世紀に入って、日本の図書館で最もこの法則の具現者となったのは大学図書館であろう。

筆者の採用時 (1998 (平成10) 年・東京外国語大学附属図書館) は、タイプライターで洋書カード目録を作成していたが、その後急速に電算化が進んだ。また、外国雑誌の電子ジャーナル化、Webcat → CiNii Books & Research による文献検索の容易化、さまざまなオンライン・データベースの提供開始、情報リテラシー教育業務の進展、機関リポジトリによる論文 (研究成果) のオンライン無料公開、そしてラーニングコモンズの設置と、この20年の間、大学図書館は急激に成長したのである。

では、この変化が激しい大学図書館という現場での我々の環境や業務は次の10年後、どのように変化しているのだろうか？

大学図書館はこれまで、学術情報の体系的な収集・蓄積・公開や、教育・研究に対する支援などの役割・機能を担ってきたが、教育・研究活動のDXの促進や、世界的に加速するオープンサイエンスの潮流の中、新たなコンテンツの管理、サービスの提供が求められてきている。

こうした中、科学技術・学術審議会情報委員会の下に「オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方検討部会」が設置され、このたび審議のまとめが公表された。このまとめでは、これからの大学図書館が従来のいわゆる電子図書館という意味ではない「デジタル・ライブラリー」に変容するとし、研究成果の更なる公開、大学図書館という場の新しい意味、それらを支える次世代人材の育成、そしてこれらを実現するための大学図書館間連携について提言がなされている。

そこで当分科会では、これからの大学図書館に求められる役割や機能等について、この審議のまとめの内容に関連する実践者や研究者に登壇して

いただき、それぞれの実践や研究などによる知見からの報告・所見・提言を頂く。それを基に会場との議論を深めて、現場の人々の心の中に日々の業務の拠り所が生まれることを企図するものである。

基調講演

「『オープンサイエンス時代における大学図書館』はどうあるべきか：「検討部会」の審議内容を中心に」

竹内比呂也 (千葉大学副学長、大学院人文科学研究院教授、附属図書館長)

講演

「オープンサイエンス時代における大学図書館への期待－研究データ管理と即時OAにどのように立ち向かえば良いのか？」

船守美穂 (国立情報学研究所情報社会相関研究系准教授)

事例報告

「電子ジャーナルの転換契約」

村上康子 (千葉大学附属図書館利用支援企画課長)

講演

「配慮を必要とする学生」

長田洋一 (盛岡大学文学部教授)

講演

「大学図書館^{ヘンカク}をDXする」

野中雄司 (富山大学研究推進部学術コンテンツ課長)

講演

「今後のメタデータ流通を担う人材を考える」

飯野勝則 (佛教大学図書館専門員)

講演

「これからの大学図書館職員のあるべき姿とは？」

檜原啓一 (東北大学附属図書館総務課専門員)

パネルディスカッション

登壇者全員によるまとめ

(吉植^{よしうえ}庄^{しょうせい}栄：盛岡大学文学部)

★第3分科会

学校図書館★

学校図書館活動の活性化

—— 学校の「魅力」発信 ——

●午前の部

学習指導要領では、学校図書館について「読書センター」「学習センター」「情報センター」という三つの機能を有することが示されている。

「GIGA スクール構想」が本格始動し、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に取り組む中であって、学校図書館が今後も重要であることに変わりはない。むしろ、「個別最適な学び」「協同的な学び」の実現のために、学校図書館が担う役割はより一層大きなものとなり得る。

本分科会午前の部では、学校図書館の三つの機能について「読書指導」「学校図書館運営」「情報活用」という観点から捉えていく。

「学校図書館運営」の面からの基調講演は、「仙台市図書館学校連携事業の試み」というGIGAスクール構想実現化への先駆的な取り組みである。ICT活用を図り、児童生徒の自主的・自発的かつ協働的な学習活動を支援する学校図書館の在り方、その方途をお示しいただく。

実践報告は、「情報活用」の視点から、情報の収集・選択・活用能力の育成を図ることを目指した大船渡市立大船渡北小学校の事例、「読書指導」の視点から、想像力を培い豊かな心や人間性・創造力を育むことをテーマとした花巻市立湯本中学校の実践事例を取り上げる。

基調講演

「仙台市図書館学校連携事業の試み－GIGAスクール構想を踏まえた学校支援－」

浅野 佑一（仙台市民図書館主査）

事例報告 1

「主体的な学びを支える学校図書館教育を目指して」

浦嶋 律子（大船渡市立大船渡北小学校教諭）

事例報告 2

「豊かな心を育む読書活動の工夫」

晴山 雅恵（花巻市立湯本中学校教諭）

（照井大道：盛岡市立向中野小学校）

●午後の部

少子化や人口減少社会に対応した活力ある学校づくりは、義務教育諸学校・高等学校の別なく、令和の時代の喫緊の課題である。児童・生徒が自分の価値を認識するとともに相手の価値を尊重し、多様な人々と協働しながら持続可能な社会の創り手となることを目指して、全ての学校に特色・魅力ある教育の実現が求められている。その中で、学校図書館においても校内外におけるさまざまな活動が展開されている。そこで、本分科会午後の部では、「学校の『魅力』発信」をテーマに、各学校の図書館活動を通じた「活力のある学校づくり」の取り組みについて報告・情報共有を行う。

基調講演は、いまや「伝説の図書館」とも称される埼玉県立飯能高等学校の「すみっこ図書館」の取り組みについてご紹介いただき、「これから私たちに何ができるか」という「学校図書館の未来の可能性」についてご教示いただく。

実践報告は、岩手県内高校の図書館・図書委員会の活動として、県立北上翔南高等学校と県立水沢商業高等学校の活動事例と今後の課題等をご報告いただき、学校図書館の「今」を共有する。

「主体的に学習に取り組む態度」を養う場として、また、児童・生徒が「輝ける場」としての「学校図書館」の在り方を皆で考える分科会である。

基調講演

「生徒の心のすみっこに入りこむ図書館になろう」

湯川 康宏（埼玉県立飯能高等学校主任司書）

事例報告 1

「本校の図書館活動の取組と課題について」

平野 聡子（岩手県立北上翔南高等学校教諭）

事例報告 2

「地域の図書館と連携した本のリユースによる読書推進活動」

中村 和宏（岩手県立水沢商業高等学校教諭）

（おいかわひろずみ
及川浩純：盛岡大学附属高等学校）

★第4分科会

児童サービス(1)★

子どもと本とのよい出会いを

子どもにとって読書は、創造力を豊かにし、生きる力を育む上で大きな力を持っています。新たなメディアの普及で大量の情報にさらされ、戦争や気候変動などさまざまな問題に囲まれた現代の子どもたちにとっては、とりわけ重要さを増していると言えるでしょう。

しかし私たち図書館員は、子どもたちに本の魅力を十分に伝え、読書に誘うことができているでしょうか。もっと何かできるのではないか——そんな思いから、テーマは「子どもと本とのよい出会いを」としました。

基調講演では、東京子ども図書館理事長の張替恵子氏にご登壇いただきます。張替氏は、東京都日野市立図書館勤務を経て、1993年より東京子ども図書館に勤務されています。長年ブックリストの編集や書評に携わり、ストーリーテリングやブックトーク等さまざまな方法を通じて子どもたちに本を手渡してこられました。そのご経験と根幹にある考え方についてお話いただきます。

続く事例報告では、東京子ども図書館職員の護得久氏から、丁寧な選書の実際や選んだ本を手渡す工夫についてご報告いただきます。

また、岩手県内の事例として、久慈市立図書館の金久氏から、地域と連携した調べ学習の取り組みについてご報告をいただきます。

多くの皆様のご参加をお待ちしております。

基調講演

「まだ、夢を見ることができるか

ー子どもと本の幸せな出会いを願って」

張替恵子氏（（公財）東京子ども図書館理事長）

報告1

「本を選び、手渡す 東京子ども図書館・児童室の実践から」

護得久えみ子氏（（公財）東京子ども図書館職員）

報告2

「久慈市立図書館を使った調べる学習コンクールー市内関連施設との連携についてー」

金久由美子氏（久慈市立図書館司書）

まつだけいこ
（松田恵子：岩手県立図書館）

読書が子どもに与える影響

新型コロナウイルス感染症の拡大により、学校においても私生活においても子どもたちの生活は一変してしまいました。人と接したり会話したりする機会が減るなかで、多様な考え方や生き方に触れられる読書が果たす役割は、非常に大きなものであったと言えます。

今また、3年超に及ぶ自粛生活が区切りを迎え、子どもたちを取り巻く環境は、再び大きく変わろうとしています。アフターコロナという新たな環境への柔軟な対応が求められる今日、読書の効果や、子どもたちへの影響を学び、それを今後の活動にどうつなげられるかを参加者の皆さんと一緒に考えたいと思います。

基調講演では、東京大学教授で言語脳科学等が専門の酒井邦嘉氏をお招きし、読書活動が子どもにどのような影響を与えているかを脳科学の観点からお話しいたします。モバイル端末の一般化や電子書籍の普及に歩を合わせるように、学校教育現場にもタブレット端末や電子教科書が導入され、子どもと本を巡る環境はまさに今大きな変化を迎えています。子どもにとって読書はどんな意味を持つのか、酒井氏のお話を聞き、過渡期の今こそ改めて子どもと本の在り方を見つめなおしてみたいと思います。

続く事例報告では、岩手県内での取り組みをご報告いただきます。花巻市立図書館の読み聞かせボランティア団体「もじもじクラブ」で活動される阿部りか氏からは、今までの活動を通して実地で得られた知見をご報告いただきます。もじもじ

クラブは県内で初めてブックスタート事業に取り組んだボランティア団体であり、現在もイベントなどを開催して精力的に子どもと本の現場に関わり続けています。

県内で絵本専門士として活躍されている藤村友樹子氏からは、日頃の活動や豊富な経験から見た絵本と人との結びつきについての事例などをご報告いただきます。藤村氏は絵本専門士の資格を取得する以前から読み聞かせのボランティアを続けられており、長年にわたり絵本と子ども、絵本と人との関わりに尽力してこられました。東日本大震災の発生当時は、岩手県沿岸の宮古市にお住まいで、被災地で絵本を届けて歩かれた経験もお持ちです。

それぞれの登壇者の発表を通じ、子どもと読書の在り方について深く考える場にできればと思います。皆様のご参加をお待ちしております。

基調講演

「脳から考える読書が子どもに与える影響」

酒井邦嘉氏（東京大学教授）

報告1

「図書館でつながる仲間の輪」

阿部りか氏（花巻市立花巻図書館 読み聞かせボランティア もじもじクラブ）

報告2

「絵本と子どもの間に立って」

藤村友樹子氏（絵本専門士 絵本探検部えとことば主宰）

（福岡 和：岩手県立図書館）

★第5分科会

図書館情報学教育★

日本の図書館情報学教育の現状：『日本の図書館情報学教育』調査から

図書館情報学教育部会（教育部会）では、日本の図書館情報学教育の実態に関する調査を行い、その結果を出版する事業を行ってきました。古くは『図書館学教育担当者名簿』（1963, 1968, 1973, 1978, 1983年。年数はそれぞれ調査実施年）、『日本の図書館学教育』（1988年）、そして『日本の図書館情報学教育』（1995, 2000, 2005年）となります。『日本の図書館情報学教育』では、大学別開講状況、図書館情報学開講大学一覧、図書館情報学教育担当者名簿が主たる内容となっていました。これらの調査は、日本の図書館情報学教育を考えていく上での基本的なデータとして機能してきました。筆者が現行の司書養成科目に関する文部科学省の会議に出席した時にも、このデータが参照されたことがありました。

この一連の調査出版事業ですが、2008年に『日本の図書館情報学教育 2005』として刊行されたのが最後となっています。これは、日本図書館協会が公益法人に移行した際に活動部会の会計のあり方が変わったためです。それまでの部会として独立した会計を閉じて、単年度で完結する部会活動への交付金をやりくりする形になり、数年に1回実施する事業の実施が難しくなりました。

一方で、公益法人移行後の教育部会への指定寄附が一定の金額に達しました。教育部会へのご厚意にお応えするためにも、これまでのご寄附いただいた資金をベースに改めて『日本の図書館情報学教育』に関する事業を実施することにいたしました。

さて、『日本の図書館情報学教育 2005』（調査実施は2004年度）以降、図書館情報学教育の環境も大きく変わりました。まず、学校司書モデルカリキュラムが公表され、これに基づいた学校司書の養成教育が提供されるようになりました。司書資格のカリキュラムも改正されています。また、大

学全体においても少子高齢化に影響を大きく受けており、リカレント教育や高大連携教育といったさまざまな動きがあります。これらの変化に対応した調査として改めて設計していく必要があります。

そこで、今回調査は2段階に分けることにしました。最初の調査では、各大学でどのような教育プログラムを実施しているのかについてお尋ねすることにしました。そして、その回答に基づいて2番目の調査として各大学で実施されているそれぞれのプログラムの詳細をお尋ねすることを予定しています。

以上を背景として、現在『日本の図書館情報学教育』刊行に向けた調査活動を進めているところです。現時点（2023年8月）では2番目の調査に取りかかり始めたところになります。この分科会では、最初の調査の結果についてご報告するものになります。

プログラムとしては、以下のものを予定しています（タイトルは仮のものです）。

- (1) 「『日本の図書館情報学教育』に関する調査の概要」 坂本 俊（聖徳大学）
- (2) 「日本の高等教育機関における図書館員養成プログラムの実施状況について」 下山 佳那子（八洲学園大学）、水沼 友宏（桃山学院大学）
- (3) 「日本の高等教育機関における図書館情報学教育と課外プログラムの実施状況について」 大谷 康晴（青山学院大学）

日本の図書館情報学教育に関する久しぶりの大規模調査の報告となります。高等教育、大学における図書館情報学教育にご関心のある方は、ぜひ奮ってご参加ください。

おたにやすはる

（大谷康晴：JLA 図書館情報学教育部会部会長、青山学院大学）

令和3年改正著作権法の施行後の動向

—— 図書館サービスに活かす上で考えたいこと ——

令和3年改正著作権法については、国立国会図書館からの絶版等資料の個人送信は2022（令和4）年5月から開始され、図書館等からの図書館資料等の個人送信は2023（令和5）年6月から施行されている。図書館等からの個人送信については3年にわたり、図書館等公衆送信サービスに関する関係者協議会において協議が行われ、2023年5月にガイドライン等が設定された、令和3年改正著作権法の施行後の動向を報告する。

令和3年改正著作権法は、「図書館関係の権利制限規定の見直し」として、「(1)国立国会図書館による絶版等資料のインターネット送信」「(2)各図書館等による図書館資料のメール送信等」を実施できるようにする内容であった。

(1)は、「特定絶版等資料」（図書館送信の送信対象資料である「絶版等資料」のうち、3か月以内に複製等の予定があるものを除いたもの）を登録利用者に直接送信可能とするものである。

2022年5月から国立国会図書館は送信を開始しており、2023年1月からプリントが可能となっている。

(2)は、送信業務を適切に実施できる体制を構築した図書館等（特定図書館等）が、補償金を支払うことで、著作物の一部分（政令で定める場合には全部）をメールなどで送信することが可能とされたものである。改正では、全部複製送信ができるものとして、「国等の周知目的資料」があらたに規定されたが、「発行後相当期間を経過した定期刊行物に掲載された個々の著作物」については、政令に移された。これは「著作権者の利益を不当に害しないと認められる特別な事情があるもの」と判断されたことからである。

実際の運用は、日図協や出版社で構成する「図

書館等公衆送信サービスに関する関係者協議会」が2022年10月に発足し、これまで協議をおこない「図書館等における複製及び公衆送信ガイドライン」を5月30日にまとめた。改正法は6月1日に施行された。

第107回全国図書館大会では、改正法公布時点での制度等について、文化庁、全国公共図書館協議会、出版社側弁護士からの報告があった。

第108回全国図書館大会では、「特別報告：著作権法の改正は、図書館サービスにどのような影響を与えるか」として、一橋大学の生貝直人氏「法改正の背景と諸外国における図書館の公衆送信サービスの動向と課題」、日本図書館協会の取り組み、国立国会図書館の取り組みを報告した。

今回は、これまでの経過を確認しながら、「図書館等における複製及び公衆送信ガイドライン」の報告、国立国会図書館の取り組みとサービスの状況の報告、これらを踏まえて今後の方向性などを議論したい。

1. 事例報告

「令和3年改正著作権法の施行後の動向」

小池 信彦（日本図書館協会著作権委員会委員長、調布市立図書館）

2. 事例報告

「国立国会図書館絶版等資料個人送信の状況」

松崎 宏樹（国立国会図書館利用者サービス部サービス企画課課長補佐）

3. 質疑

事例報告者と学識者による討議（登壇者は未定）

「今後の方向性」

（小池信彦：JLA 著作権委員会委員長）

★第7分科会

図書館の自由★

戦争と図書館

2022年2月24日に始まったロシアのウクライナ侵攻によって、ウクライナの図書館は大きな被害を受け、ロシア占領地ではウクライナ文化・教育への弾圧が行われています。一方でウクライナの図書館ではロシア語の書籍が大量に撤去されているという報道もあり、あらゆる情報を提供する使命を持つ図書館の存在意義が問われる状況となっています。

また、日本においても太平洋戦争の際には多くの図書館が被災し、さらには思想統制に伴う検閲や弾圧が行われ、思想善導の施設としての役割を負わなければならないという事実もあります。このように戦時下では古今東西の図書館が弾圧や被災の対象となってきました。

今回の分科会では、「戦争と図書館」をテーマに、日本における戦時中の図書館への思想統制と検閲の状況についての講演を基に、戦時下における図書館の状況についての理解を深め、戦争と向き合う図書館について考えていきます。

基調報告「図書館の自由・この1年」

山口真也（沖縄国際大学、図書館の自由委員会委員長）

この一年の図書館の自由に関する出来事を振り返り、図書館の自由委員会での議論と対応を報告します。文部科学省からの拉致問題関連図書の実要請、公衆送信サービスに関わる利用者情報の扱い、体温測定カメラへの顔画像保存問題等を取り上げる予定です。

講演「旧大橋図書館から引き継がれた発禁本」

新屋朝貴（（公財）三康文化研究所附属三康図書館）

三康文化研究所附属三康図書館は、明治期最大の出版社である博文館が設立した大橋図書館（1902年～1953年）の蔵書を引き継いでいます。旧大橋図書館の資料のうち、戦時中に当時の発禁本・閲覧禁止本の対象となった「憲秩素本」と呼ばれた資

料群があります。

これら資料とカード目録には閲覧禁止の印や、風壊、秩素といった印や書き込みがされた一方で、資料はカード目録ごと別の場所に保管され、官憲を書庫内に立ち入らせず守り抜いた、というエピソードが伝わっています。戦時中に蔵書の閲覧禁止や官憲による没収に対してどのような対応をしたのかについて報告をいただきます。

講演「戦時下における県中央図書館と地方中央図書館—旧上伊那図書館の資料から—」

濱 慎一（伊那市創造館）

上伊那教育会が1930年に設立した旧上伊那図書館は開館当時「壮麗完備天下に誇る」と形容された図書館です。旧上伊那図書館の資料を引き継ぐ伊那市創造館には、当時の業務日誌や文書等が保存されており、伊那警察署による発禁図書の差し押さえ・没収の記録が残っています。また、地方中央図書館としての役割を果たそうとした上伊那図書館と、長野県の中央図書館に指定された県立長野図書館との、当時の状況や関わりについて残された資料を基にご講演いただきます。

講演「戦時下の図書館での思想統制—検閲の事例と「図書館の自由」への道—」

荒木英夫（元・気仙沼市立図書館長、元・図書館の自由に関する調査委員会委員）

戦時下の少年時代に過ごされた関東州での児童書廃棄などの体験と気仙沼図書館に残された宮城県内部通達（1944年5月20日）の二つの側面から、戦時下の思想統制についてお話しいたします。検閲については、特に気仙沼市立図書館の館長菅野青顔が戦時中に警察の圧力から「社会主義文献」の廃棄に抵抗した事例とそれが図書館の自由にどうつながったのかを中心にご講演いただきます。

研究協議

参加の皆さんと一緒に考察を深めていきます。

（千 錦烈^{せん すずれつ}：JLA 図書館の自由委員会、関東学院大学）

SDGsと図書館、誰も取り残さないインクルーシブな図書館を目指して

IFLA（国際図書館連盟）は、2015年に国連で採択された17の持続可能な開発目標（SDGs）を含めた「持続可能な開発のための2030アジェンダ」（以下、「2030アジェンダ」と略）の実施の支援と貢献に取り組んでいます。本分科会においては、誰一人取り残すことなく「すべての人が読み書きできる世界」をめざす「2030アジェンダ」の達成のために、図書館は何かができるのかについて講師と参加者がともに考えていきます。

最初にIFLAの障害者サービスに関わる委員会の常任委員を務める中で国際DAISYコンソーシアムを創設し、情報アクセスの分野でグローバルな活動をしている河村宏氏（NPO法人支援技術開発機構）が「障害者サービスからインクルーシブなサービスへ：SDGsが図書館界に求めること」というテーマで基調講演を行います。講演では、「すべての人が読み書きできる世界」を2030年までに実現する「2030アジェンダ」と連携することによって、日本におけるインクルーシブな図書館サービスを発展させる可能性を探ります。

次に日図協国際交流事業委員会委員長で、明治大学文学部教授である三浦太郎氏が、今年8月に、“Let's work together, let's library”のテーマで、ロッテルダムで開催された第88回IFLA世界図書館情報会議から見えてきた最新の国際動向について報告します。本大会では、とりわけ、SDGs実現に向けた取り組みに世界の図書館がどのように関わるかという点への高い関心が見られました。情報への公共アクセスを保障することや、質の高い教育を人びとに提供することなどに関わり、本大会で紹介された海外の活動事例をいくつか紹介し、その可能性を検討します。

次にIFLA特別なニーズのある人々に対する図書館サービス常任委員会（LSN）で、2015年から2019年まで議長を務め、現在はIFLAアジアオセアニア地域部会常任委員である野村美佐子氏（日本DAISYコンソーシアム）は、IFLAがSDGsに関連する情報を収集し、Webサイトで公開している「ワールド・ライブラリ・マップ」について概説します。また、このウェブサイトには図書館によるSDGs達成に貢献する活動を公開するための「ストーリー作成マニュアル」を紹介します。

最後に、これまで日本で積み重ねてきた障害者サービスと、1986年のIFLA東京大会を契機に始まった多文化サービスとをさらに発展させてインクルーシブな図書館サービスを実現することが「2030アジェンダ」実現への貢献となることから、日本の図書館におけるインクルーシブな図書館サービスに向けた取り組みを進めるための方策と、それらの活動に関する国内外への積極的な情報発信について、意見交換を行いたいと思います。

障害者差別解消法の改正により、日本でも2024年4月1日からは国と地方公共団体だけでなく、すべての事業者による障害がある人への合理的配慮の提供が義務化されます。図書館だけでなく出版社やオンラインサービス事業者も、障害がある人への情報アクセスの提供を保障することが義務になります。障害者の差別を解消して「2030アジェンダ」の実現を促進する重要な節目を前にして、改めてSDGsと図書館の役割を考える当分科会に、皆様ぜひご参加ください。

（野村美佐子：日本DAISYコンソーシアム、支援技術開発機構）

★第8分科会

障害者サービス(2)★

最新のICT技術・アクセシブルな電子図書館を活用して目指す、障害者の読書環境

視覚障害、発達障害、肢体不自由等により活字による読書が困難な人も、パソコンやスマートフォンなどを用いて自分で読めるようになる技術が進んできています。

視覚障害では、文字情報がパソコンに取り込めれば、文字情報を点字ディスプレイで点字で読むことや、音声読み上げソフトで音声合成で読むことができます。弱視（眼鏡を使っても十分に視力が出ない、視野が欠けているなどで見づらい）では、文字情報を読みやすいフォントや文字の大きさにしたり、文字と背景の色を変えるなどで読める方もいます。発達障害の方のなかには、目は見えるけれど文字を読むのが困難な方がいます。このような方には、見やすいフォントや配色にすることなどや、音声読み上げを組み合わせることで読むことができます。上肢障害や体幹機能障害の方には、本を手で持つことができない方やページをめくることが困難な方がいます。パソコンで読む場合は、手が不自由な方も操作できるポインティングデバイスなどで読むこともできます。

しかし、残念ながらこれらを知らずにサービスに生かしていない図書館が多いのも現状です。

第8分科会では、基調報告としてすべての人が利用できる図書館を実現するための最新動向について日本図書館協会障害者サービス委員会委員長の佐藤聖一氏から報告します。

次に、国立国会図書館は、今年度「電子図書館のアクセシビリティ対応ガイドライン」を発表しました。

情報は電子データになっていても、それだけで障害者がアクセシブルに読めるわけではありません。障害者が読みたい方法で読めるためには、サイトもコンテンツもビューアもアクセシブルでなくてはなりません。しかし、技術的にアクセシブルにすることが可能であっても、情報を保護する面の制約などもあり、残念ながら現在の電子書籍

や電子図書館システムが障害者、特に視覚障害者にとって使いやすいものではありません。

このガイドラインは、電子図書館サービスのアクセシビリティに対応するために初めて作られました。まだスタート地点に立ったばかりのガイドラインですので、すべての障害者がアクセシブルに使いやすいようにするために、これからさらに進歩をしていくと思われます。電子図書館システムを取り入れる図書館、すでに取り入れている図書館も、障害者のアクセシビリティを確保するためにこのガイドラインについて知っていただき、ガイドラインのより高いレベルを目指していただきたいと思います。障害者サービス担当者だけでなく、ぜひ電子書籍調達の担当者にも聞いていただきたい内容となっています。

ICT技術の発展により、障害者が自分で読める技術が進んできていることは前述したとおりですが、これらの機器やソフトの具体的な最新の情報について、視覚障害者の図書館員でもある松井進氏から紹介いたします。

ICT技術が進んだことにより、読めるようになったものもありますが、残念ながら電子書籍にはコンテンツ・サイト・ビューアなどの問題により、アクセシブルに読めないものが多数あるのも現状です。残念ながら今の時点では電子書籍を取り入れればアクセシブルになるという訳ではありません。しかしこれから先、電子書籍はさまざまな障害者がアクセシブルに読める可能性を持っています。

現在、ICT技術によりどれだけ電子書籍が読めるようになったのか、まだまだ読めない、読みにくい課題は何かについても取り上げます。

この分科会にて図書館における電子書籍の利点と課題を知り、サービスに生かしていただきたいと思います。皆様のご参加をお待ちしております。

しいはらあやこ
(椎原綾子：目黒区立八雲中央図書館)

日本図書館協会認定司書事業のこれまでとこれから

現行の認定司書制度は、1996年の生涯学習審議会社会教育分科審議会報告で言及された司書の高度な専門性評価に基づき、検討・設計され、2010年度以降実施されてきました。こうした図書館員の認定制度は海外でも、2000年代以降、活発に議論され、また制度化されてきました。さらに日本の他職種においても発展してきました。これらの知見を今後の認定司書制度に活かしていくことには意義があると考えます。以上の点から、認定司書事業委員会では、中長期的な認定司書制度のあり方を検討する認定司書制度検討委員会を設置しました。第9分科会では、認定司書制度検討委員会の報告を踏まえて、これまでの事業の成果と今後のあり方について議論していく予定です。

認定司書制度検討委員会報告

①認定司書は認定司書事業をどう捉えているか
(松本直樹、慶應義塾大学／内山寿喜、上越市教育委員会、日本図書館協会認定司書第1149号)

日本図書館協会の認定司書事業に対する認定司書の認識を明らかにするため、認定司書10名に対して聞き取り調査を行いました。申請の動機、認定司書になることへの期待とその実際、認定司書制度の課題などを調査しました。課題については、現状の制度を前提としたものとともに、今後の方向性に関するものも挙げられました。

②図書館員の人材育成：職員像の検討と研修の調査から (青野正太、駿河台大学)

図書館員の今後の研修・人材育成のあり方の検討に資するため、2点の調査を行いました。(1)各自治体で策定している図書館サービス計画における人材育成の記述を分析し、公共図書館において求められる職員像を検討しました。(2)『図書館年鑑』に収録された国内研究集会・研修会実施記録を20年間調査し、研修の動向と課題を明らかにしました。

③国内専門職における認定事業の取り組み：看護師を事例として (青野正太、駿河台大学)

認定司書制度の検討に資するため、看護師を事例として認定制度を調査し、認定要件と制度運営団体の取り組みを明らかにしました。認定司書と異なる点として(1)専門性に応じて選択できる仕組み、(2)新規、更新により評価軸の異なる認定要件、(3)教育機関との連携によるカリキュラム編成、を指摘し、認定司書制度にどのような示唆を与えることができるかを考察する予定です。

④海外図書館情報専門職における認定事業の取り組み (酒井由紀子、慶應義塾大学非常勤講師)

2000年代に創設された海外の図書館情報専門職の認定制度から、認定司書制度の発展に寄与する材料を得ることを目的に分析を行います。すでに3制度を扱った先行研究からは、日本図書館協会の制度と異なる、知識ベースにもとづく設計、内省重視の自己評価文書による審査、多種類の認定などの特徴が明らかになっています。発表ではこれらの相違点の背景も確認し、日本の特性に即した認定司書制度のあり方の議論に示唆を提示する予定です。

ディスカッションでは、以上の報告および認定司書事業委員会や認定司書審査会に長年関わった経験、さらには認定司書としての経験をもとに、認定司書制度のこれまでの成果と課題について議論することを予定しています。

ディスカッション登壇者 (五十音順)

糸賀雅児 (認定司書審査会会長、慶應義塾大学名誉教授)

岩持河奈子 (岩手県立図書館指定管理者、日本図書館協会認定司書第1202号)

大谷康晴 (認定司書事業委員長、青山学院大学)

星野 盾 (日本図書館協会認定司書第2026号)

まつもと なおき
(松本直樹：慶應義塾大学)

★第10分科会

災害と図書館★

災害と図書館

—— 東日本大震災に学び今後の対策を考える ——

東北地方を中心に大きな被害をもたらした東日本大震災の発生から12年が経過した。震災後、初めて東北で全国図書館大会が開催されることから、図書館災害対策委員会と資料保存委員会が連携して分科会を開催する。

分科会では、改めて東日本大震災における図書館の被災状況を横断的に振り返り、復旧までの歩みを検証する。図書館の被災については被害の程度や復旧までの期間に大きな差があることから、国の支援である公立社会教育施設災害復旧費補助金を中心に、図書館の復旧過程で実施された事業の報告を受け、災害からの復旧プロセスを学ぶ。

また、図書を始め図書館資料の災害、特に水害からの予防対策と対処方法について、東日本大震災以後に得られた教訓を盛り込んだ講話とワークショップから学び、今後の災害対策につなげていく。

基調報告：東日本大震災における図書館の被災と復旧概要【図書館災害対策委員会】

主旨：東日本大震災における図書館の被災状況を各県横断的に振り返り、復旧までの歩みを概観する。図書館の被災はその起因する要因により程度や復旧までの期間に大きな差が生まれていることを共有し、災害からの復旧プロセスを参加者で共有する。

講師：川島 宏／株式会社 栗原研究室

報告1：東日本大震災からの図書館に関する復旧・復興支援【文部科学省】

主旨：公立社会教育施設災害復旧費補助金について、東日本大震災やその他の災害における過去の実績を概観しながら、その制度の概要と原形復旧の考え方等を解説する。図書館が被災した場合の

復旧事業のプロセスにおいて、必要な手続きや留意しておくべき事項等をあらかじめ知っておくことで、被災経験の無い図書館においても、効率的な復旧事業の実施のために備えておきたいことを紹介する。

講師：松本 匡裕／文部科学省大臣官房文教施設企画・防災部

報告2：災害から資料を守り、救う【資料保存委員会】

主旨：資料の防災対策には、「予防」「準備」「緊急対応」「復旧」の4段階があるが、今私たちができる「予防」と「準備」を中心に、特に資料が受ける被災の中で最も頻繁に起こって厄介な、水害・水濡れ被災の対策について解説する。

また、平時からの災害リスクの把握（図書館の立地や建物の構造など）と、有事を想定した準備（行動マニュアルや必要品の整備、スタッフの訓練、被災時の相談先の把握など）が備えの要であることを、東日本大震災、そしてそれ以後の度重なる災害・被災から得られた教訓・知見をもとに紹介する。

講師：眞野 節雄／東京都立中央図書館

ワークショップ：水濡れ被災資料の処置【資料保存委員会】

主旨：水に濡れた紙資料をどのように乾燥させて救済するかという「緊急対応」の実演を行う。特に、塗工紙（表面がコーティングされた紙で、濡れたまま乾くと固着してはがれにくい）を含む資料の対応について、参加者とノウハウを共有したい。

講師：佐々木 紫乃／東京都立中央図書館

神原 陽子／埼玉県立久喜図書館

すよつぐけんたろう
(末次健太郎：JLA 図書館災害対策委員会委員長)

地方における書店の役割と図書館

小売書店の数が減少している。2003年に全国で20,880店あったのが、2022年では11,495店まで減っている¹⁾。20年間でおよそ45%の減少となる。出版文化産業振興財団（JPIC）の調査によれば、昨年9月の段階で小売書店が一軒もない自治体は全国で26.2%にのぼる。

こうした傾向に歯止めをかけようと、自民党所属の国会議員による「街の本屋さんを元気にして、日本の文化を守る議員連盟」（通称・書店議連）が、政府を説得するための「第一次提言」を今年5月にまとめた。諸報道によれば、提言では小売書店保護のためのさまざまな施策が謳われているとのことである。公共図書館に関連する施策もある。それは複本購入を避けることと、地元書店からの納入業者とすることを求めている。小売書店の保護政策は、図書館サービスにも確実に影響する。

こうした動きを横目にしながら、今大会の出版流通委員会の企画では、地方の小売書店と公共図書館の望ましい関係について意見を交わすことを目指す。書店と図書館の目的の違い、あるべき協力関係と役割分担について、それぞれの関係者の意見を聞きながら考える。

書店と図書館の関係については次の論点がある。小売書店との共存のために行われる効果的な図書館の対応というものは果たしてどのようなものになるのだろうか。また、図書館側が対応することによってどの程度小売書店の経営が改善されるのか。書籍や雑誌の購入の減少は、図書館のせいだけで引き起こされているわけではない。おそらくインターネットで閲覧できるニュースや娯楽コンテンツのほうが影響は大きいと予想される。そうした状況下で、小規模自治体で小売書店を維持し続けたいならば、その自治体の住民はそれなりのコストを支払うことになる。コストは、補助金、

競争の制限、図書館サービスの低下などの形となるだろう。そのとき、正当だと考えられるコストはどの程度になるのだろうか。

基調報告者はJPIC専務理事の松木修一氏である。JPICは、出版社、取次会社、小売書店の関係者が役員として名を連ねる財団法人であり、出版文化産業の振興と読書活動の推進を行っている。「書店のない市町村」について調査したのは同団体であり、書店議連との関係も深い。松木氏からは、出版関係者として出版産業の現況と地方小売書店の状況について話を聞く。

二人目の登壇者は八戸ブックセンター所長の音喜多信嗣氏である。八戸ブックセンターは、2016年に八戸市によって設立された公営の書店である。民間書店への補助でもなく図書館の充実でもない方法で、地方自治体が書籍へのアクセス機会を高めようとした珍しい事例となる。音喜多氏からは、公設公営の書店というコンセプトと、その運営の状況について話を聞く。

三人目の登壇者は、日比谷図書文化館の元図書館部門長で現アドバイザーの菊池壮一氏である。かつてリブロ池袋本店での勤務経験があり——『書店に恋して』（晶文社、2018）という著書もある——、図書館の現場と書店の現場それぞれに詳しい。菊池氏からは、書店と図書館の役割の違いについて話を聞く。

なお、この企画は先に挙げた論点の答えを求めるものではなく、議論がどのような広がりをもっているかを明らかにし、聴講者と情報を共有することを意図している。

注

1) 出版科学研究所「日本の書店数」

<https://shuppankagaku.com/knowledge/bookstores/>

おれぼろのき
(大場博幸：日本大学文理学部)

★第12分科会

多文化サービス★

暮らしの中の情報と多文化サービス

—— 岩手県の事例を通して ——

自然災害時に日本語を母語としない人々への避難情報や安全を伝える手段や言語の問題がクローズアップされたのは阪神淡路大震災や東日本大震災の経験からでした。そして、2020年開催予定であった東京オリンピックを目指して首都圏内の公的機関のWebサイト上では一気に多言語化が進みました。また、交通機関や観光地などのサイン表示の多言語化も行われました。コロナウイルス感染状況下では、Webによる在住外国人や訪日外国人に対応した20言語以上の多言語による緊急時の情報発信が急速に実施されました。

現在日本では300万人に近い外国人が暮らしています。それらの人々の日本生活に必要な情報の入手先の中に図書館は含まれているのでしょうか。多文化サービス委員会は、在住外国人を対象とした図書館の多文化サービスに長年取り組んでいます。同じ自治体や地域の多文化共生の場で活躍している行政の部署や関連団体との連携が必要であることを近年痛感しています。

岩手県での開催を踏まえて第12分科会では、次の講師の方々の講演と報告を計画しています。

基調講演では、多文化サービスの基本と理念に立ち戻って多文化サービスがなぜ必要なのか、そして多文化共生との連携の必要性についてもお話させていただきます。

静岡県で多文化共生施策に関わる首長部局を含めた自治体内の関連部署と自治体外の組織・団体、大学機関との連携についての報告があります。

未曾有の震災を乗り越えてきた岩手県遠野市で多文化共生の現場で活躍されている講師による、地域で暮らす日本語を母語としない人々に対して、安心して楽しく生活を送ることができるような取り組みについて報告を行ってまいります。

一関市は、2023年5月15日に外国人市民等支援本部を設置しました。外国人市民に対する一関市

立図書館の支援の取り組みの報告を行ってまいります。

また、多文化サービス委員会の一年間の報告も合わせて行います。4年ぶりの対面の場を生かして分科会後半には、講師の方々を迎えてパネルディスカッションを行い、会場参加者の意見を取り入れて活発な議論の場となることを期待しています。

○基調講演 平田泰子（多文化サービス委員会）
「暮らしの情報をすべての住民に」

○委員会報告 浜口美由紀（多文化サービス委員会）

「多文化サービス委員会この1年」

○報告1 那珂元（常葉大学）

「静岡県での多文化共生推進部署・団体・組織と公共図書館との連携について」

○報告2 福寄順子（一般財団法人遠野市教育文化振興財団）

「外国人市民と地域をつなぐゲートウェイとして」

○報告3 佐藤俊憲（一関市立一関図書館）

「一関市の外国人市民等への支援について」

○後半 パネルディスカッション

「多文化社会における図書館政策～情報・知識へのアクセス保障のために～」

平田 泰子（多文化サービス委員会）

那珂 元（常葉大学）

福寄 順子（一般財団法人遠野市教育文化振興財団）

コーディネーター：阿部 治子（豊島区立中央図書館・多文化サービス委員会）

多文化サービスや多文化共生に関心を持っている方々のご参加をお待ちしています。

（浜口美由紀：JLA 多文化サービス委員会委員長、長崎純心大学）

★第13分科会

非正規雇用職員★

指定管理者・委託で働く非正規雇用職員

公立図書館運営の民営化の進展に伴い、指定管理者や委託で働く非正規雇用職員が年々増えています。その数は2011年には7,984人でしたが、2022年には15,075人と倍近くになり、職員数全体の36%に及んでいます（日本図書館協会 日本の図書館統計2022）。同じ期間に正規職員は11,759人から9,377人と減り続け、直接雇用の臨時・非常勤職員（現在は会計年度任用職員）は15,705人から17,453人と微増（割合は44%→42%と低下）に留まっています。この間の図書館職員総数は35,448人から41,905人と6,458人増加していますが、これはほとんど指定管理者・委託職員によるものと言っても過言ではありません。

これらの職員の多くは会計年度任用職員と変わらないか、もしくはそれより低い待遇と不安定な雇用の状態に置かれています。しかし職員自身が声を上げることは厳しいものがあり、同じ非正規雇用であっても直接雇用の職員とは違って、その声が今まであまり注目されることはありませんでした。また民営化の是非を巡る議論の中でその賃金の低さが問題とされることがあっても、実際に現場の図書館を支えて働く人としての捉え方もなされてきたとは言えません。

今年2月にNHKの「NEWS おはよう日本」で鹿児島県指宿市の図書館で働くNPO職員の厳しい労働実態が報道され話題になりました。これを契機として日本図書館協会でも会計年度任用職員のみならず、委託や指定管理者で働く職員の問題に取り組んでいく機運が高まりました。その結果が5月に公表した「図書館非正規職員の処遇についてのお願い」になりました。非正規雇用職員に関する委員会では、さらにこの問題を深めるために今回の分科会を企画しました。

内容は次の通りです。

基調講演は都留文科大学教授の日向良和氏で「図書館の非正規雇用職員について」と題して、直

接・間接を問わず非正規雇用の図書館職員が直面している問題点について話していただきます。日向氏は昨年ツイッターの投稿で話題になった非正規職員の支援者でもあります。

次の報告では日本図書館協会非正規雇用職員に関する委員会委員長の小形亮が「指定管理者・委託で働く職員」として、指定管理者導入による職員構成の変化、調査や聞き取りによる当事者の意識などについてお話しします。さらに図書館協会の「図書館非正規職員の処遇についてのお願い」についても解説します。

3番目はこの分科会を行うきっかけにもなった鹿児島県指宿市のNPO「そらまめの会」の理事長下吹越かおる氏です。「NPOによる公共図書館の指定管理者制度とは」と題して、長年指定管理者として指宿市の図書館のサービスの発展拡大に努めてきた歴史と、市からそれに見合う経費が支払われないため運営が厳しい状況に置かれている状況について、管理者と働く職員の双方の立場から報告します。

最後は非正規雇用職員に関する委員会委員の松井祐次郎の「非正規雇用（民間）のための法令・政策」です。この問題については労使交渉など当事者の努力による解決に限界があるため、国や自治体の法令、政策は極めて重要です。各地の公契約条例や国の「働き方改革」に伴う法整備や今後必要とされる対策について報告します。

講演と報告の後は会場からの質疑に答えるとともに、ディスカッションを予定しています。

図書館職員数の3分の1を占めるようになった委託・指定管理者で働く職員の問題は、会計年度任用職員の問題と同様に図書館職員全体についての大きな課題と言えます。ぜひ一緒に考えてみませんか。ご参加をお待ちします。

（小形 亮：JLA 非正規雇用職員に関する委員会委員長）

住民が取り組む図書館職員問題

図書館友の会全国連絡会（図友連）が企画する分科会である。図友連は全国の図書館づくりの運動をする市民グループ・個人のネットワーク組織で「手をつなぎ 図書館支える 図友連」を合言葉にしている。

公共図書館運営を担う図書館職員の実状は深刻である。基幹となる専門的サービスを担う多くが、非正規の不安定雇用の図書館員である。官製ワーキングプアの過酷な一端が、公務非正規女性全国ネットワーク（はむねっと）の活動や狭山市の図書館職員の解雇事件でようやく明るみにでてきた。

2023年8月に厚生労働省が発表した2021年所得格差で格差が過去最大になったこと、スイスのシンクタンクの「男女格差報告」で調査146国中125位という現実に見えるように、日本社会構造の劣化荒廃が進行する中の問題でもある。市民の図書館を実現させる立場から、非正規図書館職員の問題を論議する。

分科会は基調講演とパネルディスカッションの二部構成とする。

【基調講演】渡辺百合子（公務非正規女性全国ネットワーク（通称：はむねっと）共同代表）
「76%が非正規で、図書館は持続可能か？」

1）図書館で働く非正規職員の調査から

自治労連「誇りと怒りの2022アンケート」、滝本アサさんのアンケート、2021～2023公務非正規女性全国ネットワーク調査から、図書館非正規職員の待遇を分析する。また、やりがい搾取といえる働き方、司書の専門性とは何かを、調査の自由記述やインタビュー発言から探る。

2）図書館は持続可能なのか

蔵書は地域の財産であり、収集、蔵書構成や資料提供、保存は専任の職員が担うべき仕事だ。しかし、地域住民でもある職員が、1年の不安定雇用で、1人で生活できない賃金で働いているのが

図書館。

図書館サービスの質、継続性、持続可能性について、シンポジウム参加者と共に「図書館は、職員は、持続可能なのか」を考える。

【パネルディスカッション】基調講演の渡辺氏を含む4名がパネラーとして意見を述べ、意見交換・論議し、会場発言も加えて論議を深めたい。

【パネラー兼司会】高梨富佐（子ども読書コミュニティプロジェクトみやぎ）

非正規司書の問題点として、低賃金と雇用の継続の保証がないことから、スキルアップへの意欲が低下し、専門力が低下していることがある。それによりサービスの質が低下し、市民は司書の専門性を理解しにくくなっている。加えて正規司書の募集が少ないことから、司書資格の取得希望者も減少している。図書館の持続のために何をしていけば良いのかを探る。

【パネラー】匿名（非正規職員代表）

埼玉県狭山市立中央図書館では、2022年度末会計年度任用職員の大量雇い止めが行われた。37名全員が公募対象となり、実績・人事評価が全く考慮されず1次試験の書類審査を民間企業に丸投げし、フルタイム司書3人を含め日中勤務32名中3分の1強が書類審査で雇い止めとなった。22年貢献してきた職場を追われ生活権を奪われた公募の実態を報告するとともに、継続中の復職運動の支援をお願いしたい。

【パネラー】佐久間美紀子（静岡図書館友の会）

メディアでは官製ワーキングプアの典型例のように報じられている。しかし市民の側は、「司書の専門性と経験の蓄積が重要」と主張しながら、この事態にうまく対応してこれなかった。図書館で働く人達のために、これからの図書館のために、私たち市民ができることは何か考えたい。

いけざわ のぼる
(池沢 昇：図書館友の会全国連絡会)



霞が関だより

▶第239回

●文部科学省

令和4年度「読書活動推進事業」の取り組み事例について

文部科学省では、「子どもの読書活動の推進に関する法律」に基づき、全国的な読書活動を総合的に推進するため、高校生等の不読率の改善、「新しい生活様式」などに対応した読書活動や新学習指導要領を踏まえた学校図書館の機能強化や活性化に向けた特色ある先導的な取り組みを実施するとともに、その成果や課題について検証、分析を行い、効果的なモデル化を試みています。

取り組み事例紹介の2回目となる今回は、「発達段階などに応じた読書活動推進事業」を実施した和歌山県教育庁生涯学習局生涯学習課の南祐貴様にご執筆いただきました。

和歌山県内の取り組み

ー令和4年度「読書活動推進事業」子どもの読書に対するきっかけづくりー

1. 那智勝浦町での取り組み

和歌山県那智勝浦町は紀伊半島の南東部に位置し、東は豊かな黒潮が流れる熊野灘に面しており、北部には紀伊山脈の南端にあたる那智連峰が連なる人口約14,000人の「世界遺産と生まぐろと温泉」の町である。

那智勝浦町教育委員会・那智勝浦町立図書館では、4ヶ月健診時に行うブックスタートとブックスタートのフォローアップとして1歳8ヶ月健診時に絵本のプレゼントや図書館案内等を行うブックスタートプラス・おはなし会・ビブリオバトル・学校司書の配置等さまざまな事業を通して子どもの読書環境づくりに努めている。

概要【令和4年度】は以下のとおり。

- ・那智勝浦町
人口：14,261人
- ・那智勝浦町立図書館
蔵書冊数：37,199冊／利用者数：13,006人／貸出冊数：28,612冊（うち小学生4,800冊）

(1) 推進体制

図書館と地域をむすぶ協議会チーフディレクターを委員長とし、不登校児童を支援する青少年センター相談員・町立図書館長・民生児童委員・学校司書・訪問支援員・読書ボランティアの合計8人で企画運営委員会を構

成し、子どもの読書環境の充実、読書に接する場の取り組みを行っている。

(2) 具体的な取り組み

日常的に図書館に通うことが困難な地域の小学校の児童を対象として学童保育所への定期的な配本活動を行い、読書に親しむ機会を提供している。配本活動では読書が苦手で、どの本を読めばよいのかわからない子どもに対して、読み聞かせや観察・聞き取り等を行いながら興味関心に沿った書籍・電子書籍を紹介し、読書習慣の定着化を図る取り組みを行っている。

また、さまざまな事情により登校に不安のある児童や生徒への読書を通じた支援として、家庭訪問時の配本や学習支援時間を通じて、相談員との関係性を築き、子どもの孤立を防ぐとともに読書習慣の定着化・意欲の向上を図る取り組みを行っている。

この二つの取り組みでは、子どもたちの読書を支援する大人（ナビゲーター）が読書の様子を見守り、声掛けを行い、興味や関心のある書籍をナビゲートし、読書活動が学習意欲の向上や興味・関心ごとの深まりにつながるように支援し、読書に親しむ第一歩となるよう支援を行っている。

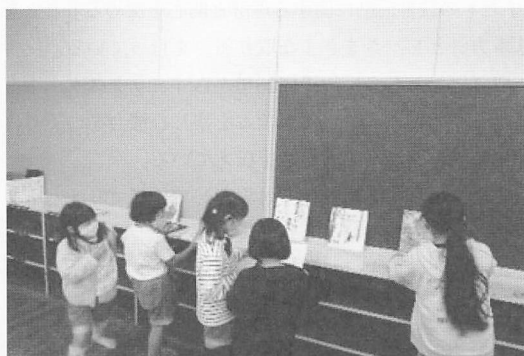
令和4年度は学童保育所4ヵ所に約200冊の配本を行うと同時に訪問時にはタブレットを持参し、電子書籍による読書に触れる機会も提供している。

配本活動については、読書への関心を高めるため、最初に読み聞かせを行い、その後、児童に配本をした書籍から、読みたい本を40分から60分読書する時間を提供した。前年に児童を対象に行ったアンケートで、「読んでみたい本の種類」として漫画との回答が多数あったため、読書へのきっかけづくりとして伝記・歴史等の漫画を配本書籍に含め、個々の児童を観察しながら子どもの興味や関心に沿った書籍類を紹介することや関心が低い児童へのアプローチとして当人に声掛けを行い、会話の内容から関心がありそうな書籍を紹介する取り組みを行った。

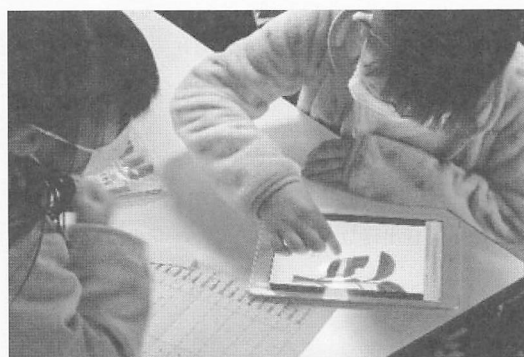
タブレットを活用した電子書籍による読書では、珍しさが先行し、落ち着いて読書を行う環境づくりが難しく、電子書籍を読むことではなく、操作を体験することが子どもたちの目的となってしまうが、読書への興味を抱かせるためにはよい効果が表れたと考えている。

またさまざまな事情により登校に不安のある児童や生徒に対しては、青少年センターに通所する子どもの学習

室での読書活動のほか、家庭訪問時には子ども向けの書籍、子どもと保護者が一緒に読んでもらいたい本、子育てに関する書籍を青少年センターの協力により選書をし、子ども・保護者に貸出を行った。不安を抱える子どもとのコミュニケーションを図る手がかりとして書籍類を活用し、訪問時に興味関心のある書籍を配本することにより、読書習慣の定着化・学習意欲向上・社会とのつながりを保つことを目的とした読書が可能な環境づくりの支援を行っている。



▲「興味のある本を選ぶ」様子



▲「電子書籍を使用して読書をする」様子

(3) 成果と課題

以上の配本活動の取り組みから読書習慣の変化として、本を読むことが「すきになった」、「すこしすきになった」との回答が年々増加してきており、書籍を持参しての訪問効果として、「いろいろな種類の本を知ることができた」、「すきな種類の本を見つけた」との回答もあり、普段読み慣れている以外の種類の本との出会いと読書に親しむ機会が提供できたのではないかと考えている。

今後も引き続きすべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において、自主的に読書活動を行うことができ

るよう、積極的にその環境を整備し、そこで子どもたちが読書を行うことで物事の広がりや深まりに期待をし、読書力に応じて興味・関心事を「広める・深められる」よう取り組んでいきたいと考えている。

2. かつらぎ町での取り組み

かつらぎ町では、子どもの読書活動を推進するため、「本を読むことの魅力、楽しさを紹介する」、「読書環境を整え、子どもが「好きな本」に出合える機会を増やす」、「子どもの読書活動に関する理解と関心を深める」ことを基本方針とし、さまざまな取り組みを行っている。

取り組みとしては、平成26年から「ブックスタート」活動を開始し、赤ちゃんが絵本を楽しむ機会をつくり、絵本の読み聞かせの大切さを伝えている。

また、小・中・高校生を対象として「ビブリオバトル大会」や、趣向を凝らした「読み聞かせ」などさまざまな事業を行い、本に興味を持つきっかけとなるよう取り組んでいる。

令和2年から、読み聞かせや自分で読んだ本を記録できる「読書ノート」を小学生に配付し、読書意欲を高め、読書する機会を増やす取り組みを行っている。

概要【令和4年度】は以下のとおり。

・ かつらぎ町

人口：15,815人

・ かつらぎ町立図書館

蔵書冊数：73,571冊／利用者数：14,718人（うち小学生2,144人）／貸出冊数：71,077冊（うち小学生12,907冊）

(1) 推進体制

①企画運営委員会

委員会において、ボランティアが製作した朗読CDの放送日時、また、子どもたちが朗読放送を聴いている時の反応や、今後の朗読本の希望などを各学年の先生が聞き取った内容をまとめ、「子ども達の実態に合わせた本の選書」、「効果音を入れ、何人かで1冊の本を読んでイメージしやすいようにする」、「本に興味を持ってもらう事を一番に考え、面白い本を選書する」等、朗読音声の製作に反映させた。

また、朗読放送関連本を学校へ貸し出す事に加え、学校図書室への朗読放送本コーナーの設置も決めた。その甲斐があり、朗読放送に聴き入る子ども、その後、図書室等でその本を手取る子どもなどの姿が多く見られた。

②ボランティア

毎月定期的に集まり、企画運営委員会で要望のあった図書や、放送可能時間、子どもたちが放送を聴いている様子を鑑み、参考図書を準備し、選書会を実施した。その後、合同練習会の開催や自宅での朗読練習を重ね、朗読CDを完成させ、学校に配付し、給食時間に放送を行った。

また、ボランティアが各学校へ出向いてライブ放送も実施し、リアルタイムでの朗読放送も楽しんでもらった。

ボランティアの方々からは、「心に残る絵本に出合えるお手伝いが出来れば嬉しい」、「色んな本と出合うことができ、また、皆さんと楽しい時間を過ごす事に喜びを感じている」、「皆さんに喜んでもらえるお話を読みたい」といった感想をいただいた。

(2) 具体的な取り組み

コロナ禍で、給食時間中は友達同士会話ができず、黙食となっていたため、子どもたちにリラックスタイムの提供と、読書に興味を持ってもらうきっかけづくりとして、町内のすべての小学校で給食時間に図書の朗読放送を実施した。

充実した取り組みにするため、図書館協議会委員、各小学校の図書主任、学校司書教諭、朗読放送に携わるボランティアによる企画運営委員会を設置し、内容について協議を重ね、取り組み内容の検討や、事業の検証等を行った。

また、事業実施にあたり、朗読の基礎を学んでももらえる「朗読ボランティア講座」を実施し、朗読ボランティアが増加したことにより、活動の幅が広がった。

ボランティアが製作した朗読CDを各小学校に配付し、給食時間に放送してもらう取り組み以外に、朗読ライブ



▲「朗読ボランティア講座」の様子

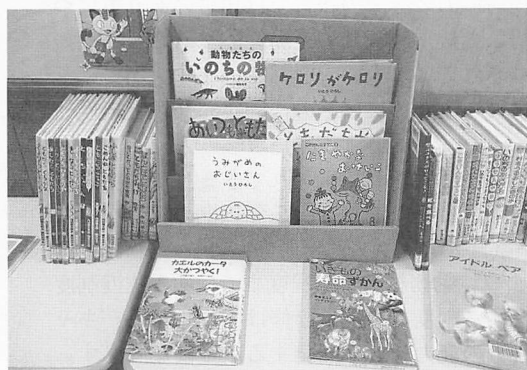
放送の実施も行った。

さらに、朗読放送関連図書を学校へ貸し出し、学校図書室や、各クラス、廊下などに本を設置し、子どもたちが本を気軽に手に取れるよう各学校で工夫し、取り組んだため、読書アンケートでお気に入りの図書を問う場面では、朗読放送本が、お気に入りの図書となっている子どもも多数あった。

また、朗読を楽しみにしているという意見も多数あったので、今後も、この事業を継続していくことで、子どもたちへの読書の関心を高め、読書活動の定着化を図る。



▲小学校でボランティアが朗読ライブ放送をしている様子



▲小学校の朗読関連図書コーナー

(3) 成果と課題

本事業で実施した小学校での給食時間の朗読放送は、読書へのきっかけづくりとして一定の成果が得られたと考える。

この事業を実施することで、朗読放送を楽しみにしている子ども、面白かったと言ってくれる子どもが増加し、関連図書を手に取る子どもも増加した。

事業については、継続することが、読書への興味の定着化であると考えるので、今後も、ボランティア、学校

と協力しながら、取り組みを続けていくことが大切であると考えます。

3. 和歌山県での取り組み

上記2町で実施した事業は、令和4年度「読書活動推進事業」として採択された国の事業を再委託したものである。

和歌山県では、企画運営委員会を設置し、事業開始時・事業実施時・事業終了時の合計3回会議を開催し、2町の事業に対し、助言などを行った。

また、かつらぎ町が実施する事業に対し、不足する図書について、県立図書館から貸し出しを行うとともに講師を派遣し、朗読を行うボランティアの研修を実施した。

4. まとめ

この事業は、市町村単独での事業としてモデル化するのではなく、県立図書館が連携・支援することで、図書を選定する人材や蔵書量に課題を抱える市町村でも導入できると考えている。

なお、事業の成果報告書は県教育委員会ホームページへの掲載等により紹介しており、2町をモデルとした「子供の読書に対するきっかけづくり」を他の市町村に広げていきたいと考えている。

子供の不読率の改善については、直ちに効果が出るものではなく、市町村が独自に実施している事業も含め、その取り組みが継続されることを期待している。

[NDC10:019.5 BSH:1.読書 2.児童]



第14期「認定司書」申請(更新申請を含む)を受け付けます

日本図書館協会認定司書事業委員会

日本図書館協会による第14期(2024年度)「認定司書」の申請を、次ページからの申請要項にもとづき受け付けます。第11期(2021年度)より申請書類の提出を電子的なものとしています。また、今年度末をもって第4期認定司書の認定証の有効期間が終了しますので、該当の方はご確認ください。

日本図書館協会が提供する認定司書事業は、司書全体の研鑽努力を奨励するとともに、司書職のキャリア形成や社会的認知の向上に資することをねらいとして2010年度に審査を開始しました。具体的には、日本図書館協会が“司書全体の研鑽努力を奨励するとともに、司書職のキャリア形成及び社会的認知の向上に資するため”、“司書の専門性の向上に不可欠な実務経験並びに実践的知識及び技能を継続的に修得し公立図書館及び私立図書館の経営の中核を担いうる”(「日本図書館協会認定司書事業委員会規程」)者に名称を付与するものです。

現在、現役(認定証が有効期間中)の認定司書は166名(認定更新26名を含む)になり、全国各地で活躍しています。認定司書がテレビや新聞といった地元のメディアで取り上げられることもあり、地域が司書の専門性に目を向けるきっかけになっています。

2009年の文部科学省これからの図書館の在り方検討協力者会議の報告では司書のあり方について「司書に必要な資質・能力は、司書資格を取得した後、図書館の業務経験や研修及びその他の学習機会等による学習等を通じて、徐々に形成されていくもの」としています。司書として職に就くのはスタートラインにすぎず、真の司書になるためにはその後の業務経験と自己研鑽が必要であると指摘しているのです。

さて、近年司書にはある程度体系化された研修制度が整備され提供されてきました。文部科学省の地区別研修は勤務経験3年以上、図書館司書専門講座は勤務経験7年以上の職員を対象としています。日本図書館協会が提供している中堅職員ステップアップ研修も(1)が勤務経験3年以上、(2)が勤務経験7年以上になります。このように勤務経験7年程度まではある程度制度が整えられていますが、それ以上の勤務経験に対応する制度としての研修はありません。キャリア論を見てもある程度の段階以降になると自分の能力を自ら開発することになります。認定司書制度は(司書資格取得以降の)勤務経験10年以上を対象としており、これまでの自己研鑽の成果を確認するとともに、既成の研修制度では対応できない段階に至った司書の方のキャリア構築の参考に活用していただければと存じます。

最後になりますが、協会公式ウェブサイトの認定司書事業委員会のページに、この制度の説明や規程類、申請書類記入マニュアル等を掲載しております。ご不明な点がございましたら、以下へメールでお問い合わせください(ただし、内容によっては、回答に1週間程度かかることがありますので、予めご了解願います)。

(公社)日本図書館協会認定司書事業委員会
電子メール：nintei@jla.or.jp

第14期日本図書館協会認定司書 申請要項

【新規申請，認定更新共通】

申請手順は以下のとおりになります。

1 申請手順

- (1) 協会ウェブサイトにあるフォーム（事業委員会のページでリンク先等はお知らせします）に必要事項を入力し，申請者番号を取得する。
- (2) 申請書類を同様にダウンロードして，取得した申請者番号を記入しつつ，書類を完成させる。
- (3) 審査料7,500円を事業委員会が指定する振込先に入金する。
- (4) 審査料の入金が確認できるもの（利用者控等），司書資格取得証明，研修受講等の証票書類，著作（デジタル形式ではない場合）のスキャンデータを作成する。
- (5) (2)で完成させた申請書類と，(4)のスキャンデータを，事業委員会が指示する方法に従って提出する。

2 申請受付期間

- (1) 申請者番号の取得のためのフォームへの申請は，2023年10月31日（火）0時0分から11月28日（火）23時59分まで
- (2) 申請書類一式のアップロード（正式な申請）は，2023年11月1日（水）0時0分から11月30日（木）23時59分まで

3 認定と審査

認定審査を受けるためには，本人が申請しなければなりません。図書館長経験者，学識経験者等から構成される認定司書審査会が図書館の勤務経験，実践的知識・技能等について申請書類に基づき審査を行います。

4 「認定司書」の名称

認定されると「日本図書館協会認定司書」の名称と認定司書番号が付与され，認定証も交付され

ます。有効期間は2024年4月1日から10年で，その間公開の「認定司書名簿」に登載され，公的に「日本図書館協会認定司書」を名乗れます。

5 費用

審査料7,500円と，認定料（協会個人会員は20,000円，協会個人会員以外は110,000円）が必要です。なお，認定証有効期間中に協会個人会員を退会して引き続き認定司書であるためには，90,000円を納付していただく必要があります。

審査料は申請者番号取得後，認定料は審査終了後認定司書事業委員会から当該費用の金融機関への振り込み金額と口座番号を通知しますので，納付してください。期日までに認定料の納付が確認できない場合には認定は無効となります。なお，費用の納付に伴う手数料は申請者にご負担ください。

6 認定までの日程（予定）

2023年12月から2024年1月に審査会による審査を行い，2月下旬に審査結果の通知を行います。認定料を納付して正式に認定司書となった方は『図書館雑誌』5月号で認定司書名簿及び審査（報告）を公表する予定です。

【新規申請の方】

1 認定要件

認定されるには，次のすべてを満たしていることが必要です。なお，図書館法第2条に定める図書館については，それに相当すると認める施設も含まれます。この判断は，『日本の図書館』（日図協）の収録対象に基づき，審査会が判断しています。

認定要件の詳細は，申請記入マニュアルでご確認ください。

- (1) 図書館法第2条に定める図書館（公共図書館〔公立図書館，私立図書館〕）において現在勤務している又は過去勤務していた経験を有すること。なお，対象は正規雇用に限定せず，会計年度任用職員，図書館業務受託企業勤務者等を含む。
- (2) 図書館法第4条に定める司書又は司書有資格者。

(3) 勤務経験に関して以下の二つの条件をいずれも満たしていること。

ア 司書資格を取得した日以降の図書館法第2条に定める図書館における勤務経験の合計が、10年以上であること、又は司書資格を取得した日以降の公共図書館、公共図書館以外の図書館、他の類縁機関の勤務経験の合計が10年（120か月）以上であること。勤務経験については2024年3月31日までの見込みで算出してよい。

イ 申請時において過去10年間のうち少なくとも5年間（60か月）は図書館法第2条に定める図書館への勤務経験を有すること。

なお、勤務期間については、別表1「勤務経験月数の補正（新規）」について他の補正係数を乗じて算出する。

(4) 申請時までの10年間に研修受講や社会的活動等、審査に関する申し合わせに定める一定の研鑽（20ポイント以上）を重ねていること。研修受講の場合は半日（2～3時間）で開催されるものを1ポイントとしている。

別表1 勤務経験月数の補正（新規）（抜粋）

補正 種別	対象（勤務先）	補正 係数
勤務先 補正	図書館法第2条にいう図書館	1.0
	日本図書館協会認定司書の審査に関する申し合わせ第8条で図書館法第2条にいう図書館に相当するとされている図書館	
	国立国会図書館	0.5
	学校図書館法にいう学校図書館	
	大学設置基準、短期大学設置基準、大学院設置基準、高等専門学校設置基準にいう図書館	
	専修学校設置基準にいう図書館	
	上記以外で、根拠法令・条例を有し、主として一般公衆に対してサービスを提供している図書館	
	地方議会図書室	
	上記のいずれにも該当しないが一般公衆に対してサービスを提供している図書館	審査会 が決定
	上記以外の図書館	
	地方公共団体が設置したまたは設置しようとする図書館の関連業務	審査会 が決定

(5) 申請時までの10年間に一定の要件を満たす著作を著していること。

ア 著作は、次の①～③のいずれかであること。

① 申請にあたって執筆したオリジナルの著作。

② 申請時から10年以内に公開された図書、雑誌記事・論文、報告書等であって、単独著作又は担当部分が明確に特定できる分担著作。

③ その他審査会が著作と認めるもの。

イ 単一又は複数（3点以内）の著作の文字数の合計が、8,000字以上であること。なお、複数の著作については、それぞれが一定の著作として成立するものであること。

ウ 図書館の業務、運営等図書館経営に資する内容を含むこと。ただし、勤務する図書館の単なる事例紹介や業務内容・手順のマニュアル作成、文献や資料による裏づけを伴わないエッセイや書評の類は除く。

エ 文章に論理的な整合性があること。

(6) 申請時までの10年間に「図書館員の倫理綱領」（日図協）等に違反していないこと。

2 申請書類

申請書類一式は以下のとおりです。全てデジタルデータの形式で提出していただきます。デジタルデータの作成方法については申請者には参照資料を提供していますので参考にしてください。

- (1) 「日本図書館協会認定司書」申請書（新規用）
- (2) 連絡先（新規用）
- (3) 勤務歴等（新規用）
- (4) 司書資格の取得を証明するもの（写し）
- (5) 審査料の入金が確認できるもの（写し）
- (6) 研修受講等記録票とその証明となる資料類（写し。可能な範囲）
- (7) 著作リスト（その書誌事項を記載したもの）と著作リスト記載著作物（複製物で構わない）

なお、(4)の書類について、過去の申請時に提出した方は、直近の申請時の「申請者番号」（5桁）を所定欄に記入してください。この番号記入によって、資料の添付は不要となります。

また、申請の段階で、認定司書名簿（インター

ネット上で公開)への記載, および審査結果報告での認定者一覧の公開(例年『図書館雑誌』の5月号掲載)について同意していただくことになっています。

【更新申請の方】

認定更新すると認定更新日(第14期では2024年4月1日)から10年間有効となり, 更新前の残存期間及び認定料は引き継がれません。

なお, 経過措置により, 第1期から第6期までの認定司書が更新申請できる期間を, すべて2027年3月31日まで(実質的には, 2026年秋の申請まで)延長しています。

1 認定更新の要件

認定を更新するには, 次のすべてを満たすことが必要です。

- (1) 認定司書として認定されていること。
- (2) 認定証交付日以降, 図書館法第2条にいう図書館又は同条の図書館に相当すると審査会が判断する図書館における勤務経験について, 別表2「勤務経験月数の補正(更新)」に記載するすべての補正種別についてその該当する補正係数を乗じて得られたものの総和が60か月(5年)以上あること。勤務経験については2024年3月31日までの見込みで算出してよい。なお, 60か月のうちには, 対象種別「図書館」(補正係数1.00)について他の補正係数を乗じて得られたものの総和が12か月(1年)以上含まれること。
- (3) 認定証交付日以降, 研修受講や社会的活動等, 内規に定める一定の研鑽(20ポイント以上)を重ねていること。
- (4) 認定証交付日以降, 内規に定める一定の要件(新規申請の場合に準ずる)を満たす著作を著していること。
- (5) 認定証交付日以降, 図書館員の倫理綱領等に違反していないこと。

2 申請書類, 送付先

申請書類一式は以下のとおりです。こちらも全てデジタルデータで提出してください。なお, ご自身の「認定司書番号」(4桁)を(1)の申請書(更

新用)の所定欄に, 必ず記入してください。

- (1) 「日本図書館協会認定司書」申請書(更新用)
- (2) 連絡先(更新用)
- (3) 勤務歴等(更新用)
- (4) 審査料の入金が確認できるもの(写し)
- (5) 認定証交付日以降の研修受講等記録票とその証明となる資料類(写し。可能な範囲)
- (6) 認定証交付日以降の著作リスト(その書誌事項を記載したもの)と著作リスト記載著作物(複製物で構わない)

別表2 勤務経験月数の補正(更新)(抜粋)

補正種別		対象(勤務先)	補正係数
補正種別	サブカテゴリ		
勤務先補正	図書館	図書館法第2条にいう図書館	1.0
		日本図書館協会認定司書の審査に関する申し合わせ第8条で図書館法第2条にいう図書館に相当するとされている図書館	
	その他の図書館	国立国会図書館	0.75
		学校図書館法にいう学校図書館	
		大学設置基準, 短期大学設置基準, 大学院設置基準, 高等専門学校設置基準にいう図書館	
		専修学校設置基準に定める図書館	
		上記以外で, 根拠法令・条例を有し, 主として一般公衆に対してサービスを提供している図書館	
		地方議会図書室	
		上記のいずれにも該当しないが一般公衆に対してサービスを提供している図書館	
		上記以外の図書館	審査会が決定
	図書館以外	地方公共団体が設置したまたは設置しようとする図書館の関連業務	0.5～0.75
		地方公共団体の業務	0.5

[NDC10: 013.1 BSH: 1. 図書館員 2. 日本図書館協会]

小規模 図書館 奮戦記

その305 プライドハウス東京
LGBTQ コミュニティ・
アーカイブ&ライブラリー

「過去」を収集し、 次世代へと継承する

ーLGBTQ コミュニティ・
アーカイブの構築をめざしてー

山縣真矢

1. 「プライドハウス東京」とは
『東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会』の開催を契機に、関連団体、専門家、企業、大使館等がセクターを超えて連携し、2018年9月に設立されたコレクティブインパクト型プロジェクトです。2020年10月には常設の総合LGBTQ+センター「プライドハウス東京レガシー」を開設。LGBTQ+の情報を発信し、安心安全な居場所を提供しています。

2. レガシー併設ライブラリー
LGBTQ+センター「レガシー」は、小さなライブラリーを併設しています。LGBTQ+関連から人権や差別、ジェンダーやフェミニズムなどの周辺領域まで、評論やルポ、小説やエッセイ、コミック、絵本など約3,000冊の書籍を配架（一部閉架）。貸出はせず、来館者はその場で閲覧できます。古い希少なものから最新刊まで揃う専門図書館的な構成で、利用者の興味関心や知識量に応じた情報を提供できます。

そして、まだまだLGBTQ+に対する差別や偏見がある中で、公共図書

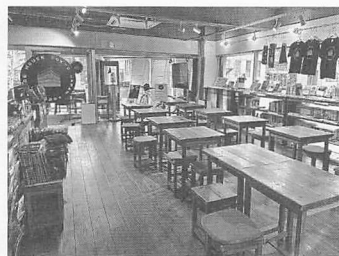


館や学校図書館では周囲の目が気になって関連図書になかなか手を伸ばせないという声を耳にします。その点「レガシー」では、周囲を気にせず本を手に取り、安心して読むことができます。大事なポイントです。

3. LGBTQ コミュニティ・アーカイブ

日本の「LGBTQ コミュニティ」はさまざまな形で歴史を紡ぎ、文化を築いてきました。しかし、それらに関する資料は個々の当事者や活動団体、研究者などによって収集・保存されてはきましたが、全体を見通す形での横断的かつ持続的なアーカイブは整備されてきませんでした。というのも、LGBTQ+のようなマイノリティ集団の歴史や文化は、「国家の歴史」や「公的なアーカイブ」などマジョリティ主体のものから往々にして周縁化されて記録が残されにくく、それゆえ、自分たちの物語は自分たちで残していくことでしかコミュニティ・アーカイブを獲得できないという現実があったからなのです。なお、ここでの「LGBTQ コミュニティ」には「アライ/ally」（LGBTQ+当事者の味方・仲間として共に活動する人たち）も含まれます。

具体的には、アーカイブを「もの」「ひと」「こと」の三つに分けています。まずは書籍や雑誌・フライヤー、写真や映像、芸術作品や記念物など実質的な「もの」です。次に「ひと」は、LGBTQ コミュニティのキー



パーソンをはじめとする当事者の語り下ろしや聞き書きなどで、生きてきた証を残していきます。「こと」はこれから企画・実施される関連イベントの記録などを想定しています。

4. 課題と今後

この3年で市販の関連書籍は相当数収集し、所蔵書籍目録も作成しました。今後も新刊や未所蔵本を追加しつつ、いま力を注ぎたいのが、一度失うと無に帰してしまうミニコミ誌や会報などの発掘・収集です。「ひと」のアーカイブも同様で、高齢化するコミュニティの重鎮たちの口述記録は急務です。また、収集した資料の整理も不可欠ですが、なかなか進まないのが現状です。資料を整理し、データベース化し、さらにデジタル化も推進したい。しかしそのためには、膨大な時間と人員、保管場所——つまり資金が必要です。これは最大の難題です。

最後に、未熟で経験の浅い私たちは、今回の寄稿を機に、願わくは図書館関係者の皆様とつながりたい。そして可能なら専門知識やノウハウ等を共有していただきたい。そして何より、ぜひ一度「レガシー」に足を運んでいただければ幸いです。

■プライドハウス東京レガシー

所在地：東京都新宿区新宿1-2-9

JF 新宿御苑ビル2階

開館時間：13時～19時（入館無料）

休館日：水曜・木曜、年末年始

Web：https://pridehouse.jp/legacy/（やまがた しんや：プライドハウス東京「文化・歴史・アーカイブ」チーム）

[NDC10：018.367]

BSh：プライドハウス東京レガシー

図書館員の本棚

デジタルアーカイブの新展開

時実象一著

東京：勉誠社

2023, 12, 304p : 19cm

ISBN : 978-4-585-30009-0 : ¥2,100 (税別)

NDC10 : 007.5

BSH : デジタルアーカイブ

本書は、2015年に出版された講談社ブルーバックス『デジタル・アーカイブの最前線』（以下、前著）の後継となる1冊です。

同じ著者により執筆され、構成の見直しや前著執筆後の進展が大きく加筆され、ページ数は218ページから304ページと4割増しに、画像や表も増えるとともに、判型が新書判から四六判に大きくなったことで見やすくなっています。一方で、伝統ある新書シリーズと単行本の違いや、昨今の物価高の影響もあって値段は倍以上となっています。ブルーバックスシリーズとして値段も手ごろに刊行され、高校生にまでお勧めできた前著とは異なり、大学テキストとしての利用や現職図書館職員への学び直しが主眼になってくる1冊といえます。

前著出版当時、2013年に渡邊英徳氏の『データを紡いで社会につなぐ デジタルアーカイブのつくり方』（講談社現代新書）、2014年に福井健策氏の『誰が「知」を独占するのか デジタルアーカイブ戦争』（集英社新書）が出版され、それらに続いての新書シリーズでの出版であり、ブルーバックスの1冊として「デジタルアーカイブ」テーマのものが出版されたことに感慨深かった記憶が思い出されます。

本書の「はじめに」の頭に「本書はデジタルアーカイブの鳥瞰図を目指している。」とあるとおり、第1章で災害アーカイブを、第2章では文

化財や書籍のアーカイブとアーカイブポータルを、第3章ではマスメディアのアーカイブを、第4章では3DとAIを軸としてデジタルアーカイブをより発展させる技術を、第5章ではアーカイブの利活用を軸に、第6章ではアーカイブの運営に欠かせない保存と著作権法などの権利面を、と手広く触れられています。

内容的にも前著以降のアーカイブの可能性の広がりや重要性を高める大きなトピックであった、「パンデミック」「ウクライナ紛争」「ジャパンサーチ」「IIIF (トリプルアイエフ)」「みんなで翻刻」「ドローン」「フォトグラメトリ」「フェイク」「クリエイティブ・コモンズ」などが取り上げられています。また、演劇公演のデジタル化がコロナ禍で急遽進展し、デジタルアーカイブが誕生したことなど、新たな動きへのフォローもされています。そして、前著でも記載があった公文書や裁判記録等については、前著の刊行後、2017年の森友学園問題や2022年10月の神戸連続児童殺傷事件を含む重大裁判記録の廃棄問題の発覚など関連する大きな事件が発生し、前著で5ページ弱だった記載が10ページ弱となるなど、紙幅を大きく増やしています。

一方、惜しむらくは前著にはあった索引が無くなったこと、また、2022年12月リニューアルで全文検索が大幅拡大された「国立国会図書館デジタルコレクション」については追記できないタイミングで校了を迎



えたようです。

自分はあまり関係ないなあと思っている読者諸氏も少なくないかもしれませんが、図書館には扱いに困った資料の相談が突然やってくるものです。筆者の勤務先でも、立派な35mm 動画フィルム4巻が持ち込まれましたが、旧軍関係で時代的に明らかに戦前で可燃性のフィルムと推定され、扱いあぐるものでした。地元のNHK 地域局に協力をお願いし、輸送と内容確認、デジタル化に協力頂き、フィルムは国立映画アーカイブへ寄贈。協力頂いたNHKでは『所さん！事件ですよ 78年前のフィルム 映っていたのは…』（2022年8月4日放送）という全国放送番組に結実した事例がありました。扱い慣れない資料が来て困ったときにどういったところに協力を頼めば良いか、目端の利かせどころといえます。

なお、ちょうど本稿掲載のタイミングで、関東大震災100年企画展「震災からのあゆみ - 未来へつなげる科学技術 -」が国立科学博物館で開催（11月26日(日)まで）されます。前出の渡邊英徳氏によりカラー化された被災状況の写真を展示し、より臨場感を感じられる工夫がされるなど、災害アーカイブの活用例の一つとして本書と共にご覧になってはいかがでしょうか。

（上岡真土：高知県立図書館）

れふあれんす

三題噺

連載その三百五

山口県立山口図書館の巻

節目の年に、 図書館のあれこれについて調べる。

◆
井関和彦

山口県立山口図書館は、明治36（1903）年7月に開設され、今年で120周年を迎えました。また、3代目である今の建物が建築されたのは昭和48（1973）年の7月で、建築50周年ともなりました。現在当館では、これを記念した周年記念事業を開催している¹⁾ところです。

そこで、当館で最近受け付けた図書館に関するレファレンスについて簡単に御紹介したいと思います。

その1

「戦前の公共図書館では、入館料を取るところがあったようだが、その入館料は何に使われたのか知りたい。」

県内の図書館から依頼のあったレファレンスです。設置者や館の規模など、さまざまな違いが考えられる上、公立図書館の会計はいわゆる予算制度に基づくため、入館料などの諸収入を右から左に運営費などに充てることは、戦前でもできなかったのではないかと思います。調査期間も短かったため、単純に、公立図書館における入館料などの用途について記載のある文献を探すこととしました。

図書館情報学の主要誌の論文・記事を検索できるウェブサイト“BIBLIS PLUS 図書館情報学文献目録”（実践女子大学・実践女子大学短期大学部図書館²⁾）で、タイトル「入館料」または「閲覧料」で検索してみますが、入館料等について論じた文献は多くなさそうです。

困ったときは、“国立国会図書館デジタルコレクション”（国立国会図書館³⁾）にさがってみます。キーワード欄に「閲覧料」または「入館料」と入力して、NDCの01（図書館、図書館情報学）で絞り込み、該当箇所のテキスト表示を頼りにそれらしいものを探します。「入館料」の語でヒットした『図書館学講座』第2巻（図書館事業研究会

編 図書館事業研究会 昭和6）の「図書館時事 文相の閲覧料値上否決」の記事の冒頭に「従来上野の図書館では、毎年十二萬圓の經常費を要し、その半分は文部省から與へ他の半分は入館料を以て支辨してゐたが（以下略）」⁴⁾という記述を見つけ、これをもって回答としました。同じく“国立国会図書館デジタルコレクション”に収録されている『帝国図書館年報 大正15年-昭和17年』（帝国図書館 大正15-昭和17）中の昭和6年度分の記載⁵⁾によると、昭和6（1931）年度の歳入合計130,274円のうち、「政府支出金」が110,535円、諸収入のうちの「閲覧料」が16,360円とあります。歳出の方を見ると、職員の給与等を除く「廳（庁）費」が39,496円とありますので、「廳（庁）費」の約半分を閲覧料で賄っている、とみることもできるでしょう。

その2

「19世紀初頭のアメリカでは、馬車に本を載せて図書館サービスを行ったというが、このことについて解説した本を探している。特にその馬車の写真を探している。」

新聞記者の方からのレファレンスで、図書館の歴史についての記事を書くために必要、とのことでした。

蔵書検索にて、件名「公共図書館」「アメリカ」で検索してヒットした資料の中に、『図書館を届ける』（中山愛理著 学芸図書 2011.3）がありました。アメリカ合衆国の公共図書館における対外サービスを主題としたこの資料の第4章では、「馬車図書館・自動車図書館の導入とティックム館長」と題し、メリーランド州のワシントン・カウンティ・フリー・ライブラリーでメアリー・ティックム館長が1905年4月に導入した「馬車図書館（book wagon）」について詳述されており、馬車図書館の写真も複数掲載

されていました。また、児童書ですが『走る図書館』が生まれた日』（シャーリー・グレン作 渋谷弘子訳 評論社 2019.12）も、ティットコム（この資料ではティットコムと表記）館長の生涯をわかりやすく紹介したものでした。馬車図書館の写真もより大きなものが多く掲載されています。

たまたまそのとき、120周年記念展示の担当者から、「当館にも馬車図書館の写真がある」という話ができました。それは、当館の初代館長、佐野友三郎が収集した図書館関係用品などで、通称「佐野友三郎コレクション（佐野コレクション）」と呼ばれています。その中に、おそらく佐野がアメリカを視察した際に収集したと思われる、海外の図書館の写真が含まれていました。佐野コレクションは、平成15（2003）年から行われた日本図書館協会の「歴史的図書館用品の収集・保存」事業の一環で、キハラ株式会社様の御厚意により、整理・デジタル化がなされています。佐野コレクションの目録を確認すると、「ワシントン郡立無料図書館巡回馬車」の写真がいくつかありましたので、そのうちの一枚の画像ファイルを資料とともに提供しました。

佐野コレクションのデジタル画像は、今のところ、ごく一部を除いて非公開となっていますが、今後、公開に向けて調整を進めていきたいと考えています。

その3

「山口県立山口図書館所蔵『上記』^{うえつふみ}を利用したい。」

県外の研究者の方からの問い合わせで、“国書データベース”（国文学研究資料館）⁶⁾で所在⁷⁾を確認済み、とのことでした。同サイトの『上記』のページによると、同書は神道に関するもので、国立国会図書館や内閣文庫（国立公文書館）などにも写本があるようです。

早速、蔵書検索にて、フリーワード「上記」「うえつふみ」「うへつふみ」で検索しますが、解説書の類しかヒットしません。よく知られているように、“国書データベース”の元になっている『国書総目録』に記載された書誌・所蔵情報は、戦前に採集されたものが中心であるため、例えば当館に所蔵があるとされている資料が、実は、当館から分かれる形で昭和34（1959）年に設置された山口県文書館の所蔵である例がしばしばあります。しかし、山口県文書館ウェブサイトの“所蔵文書検索”⁸⁾でもヒットしませんでした。

こうなると、冊子体の目録や図書原簿を確認するしかないのですが、冊子体の目録でも、それが“国立国会図

書館デジタルコレクション”に収録されていれば、キーワード検索で探せる可能性があります。キーワード欄に「上記」、出版者欄に「山口図書館」と入力して検索したところ、『山口県立図書館所蔵及保管の近藤清石先生著書並蔵書目録』（山口図書館 1930.10）p.21に『上記』が記載されていることがわかりました。この『上記』は、もともと、郷土史家であった近藤清石（1833-1916）の蔵書であり、彼の死後、「近藤清石文庫」として当館に寄託されたもののようです。「近藤清石文庫」は、現在は山口県文書館が所蔵していますが、先に見たように、そこには『上記』は含まれていません。結局、『上記』が今どこにあるのか、明らかにすることはできませんでした。しかし、現在の「近藤清石文庫」から外れた理由は推測できます。

『山口県立図書館所蔵及保管の近藤清石先生著書並蔵書目録』では、『上記』は「郷土志に關係なき圖書」に分類されています。次に「近藤清石文庫」の流れを『山口県立山口図書館 100年のあゆみ』（山口県立山口図書館開設100周年記念誌編集委員会編 山口県立山口図書館 2004.3）で追ってみると、寄託されていた同文庫は、昭和32（1957）年に「郷土資料の大部分を購入」する形で当館の蔵書となった旨の記述がありました。おそらくこのとき、「郷土志に關係なき圖書」であった『上記』は、購入の対象にならなかったものと思われます。

当館で最近受け付けた図書館に関するレファレンスについて御紹介しました。明治5（1872）年、日本初の近代図書館といわれる書籍館^{しょうじやくかん}が開館してから約150年が経ちますが、我々も図書館の歴史のひとつを担っていることを忘れずにいたいと思う今日コノゴロです。

注）

- 1) <https://library.pref.yamaguchi.lg.jp/120anniversary/>（インターネット情報源は、すべて2023年8月16日最終確認）
- 2) <https://opac.jissen.ac.jp/repo/repository/bunken/>
- 3) <https://dl.ndl.go.jp/>
- 4) <https://dl.ndl.go.jp/pid/1147859/1/125>
- 5) <https://dl.ndl.go.jp/pid/11447357/1/141>
- 6) <https://kokusho.nijl.ac.jp/>
- 7) <https://kokusho.nijl.ac.jp/work/661405?ln=ja>
- 8) <http://archives.pref.yamaguchi.lg.jp/index/page/id/220>

（いせき かずひこ：山口県立山口図書館）
[NDC10：015.2 BSH：レファレンス ワーク]



お宝紹介!

第235回
公益社団法人日本山岳会
図書室

日本で唯一の「山岳図書館」

神長幹雄

●歴史の宝庫

公益社団法人日本山岳会の図書室は、日本で唯一といわれる山岳に特化した図書館である。母体である日本山岳会も創立1905年と日本で最も古い歴史のある山岳会だが、山岳書や図書室との関係も長く深い。設立当初から会員に小島烏水をはじめとする文筆家や植物学の研究者が多く、会員の紀行や研究の成果などがその発表の場として活用されてきた。設立の翌年（1906年）4月には、機関誌『山岳』第一年第一号が発刊されている。こうした初期の『山岳』は、設立の目的のひとつが山の雑誌を発行することにあつたため、当初から山岳書には強いこだわりがあつたのである。

今回、朝の連続テレビ小説で人気の牧野富太郎も設立当初に会員だった時期がある。『山岳』の2冊目、第一年第二号に、牧野は「利尻山と其植物」という原稿を執筆し発表している。日本山岳会の図書室でさえ、そのバックナンバーが合本されたものしかなく、貴重本として保存されている。

戦前に出版された書籍には稀覯本も多く、高頭式の『日本山嶽志』の初版本や初代会長、小島烏水の『アルピニストの手記』の初版本など、貴重な書籍を所蔵している。まさに日本の近代アルピニズムを牽引してきた先駆者たちによる記録の数々だが、こうした初版本を保存していること自体、図書室の「お宝」と言えるかもしれない。

●蔵書の内容

さて、日本山岳会の図書室であるが、その歴史は、会室（ルーム）から始まったといわれている。1929年11月、東京・虎ノ門の不二屋ビルに初めてクラブルームができ、そこに図書室が設けられた。この後、虎ノ門の会室は戦災で焼け、戦前の貴重な山岳書も灰になってしまったが、なんとか1949年にはお茶の水に山小屋風の図書室を開設。だが

15年続いたこの会室も、諸般の事情から数回にわたって移転を繰り返し、現在は麴町にあるマンションの一室に落ち着いている。

蔵書は、国内外の山岳関係図書を中心にして探検・冒険の図書まで、まさに「山の図書館」そのものである。具体的な内容としては、事典・解説、目録・解題、登山史、遭難報告、自然・環境保護、山岳宗教、地域伝説・地誌・民俗学、気象、地形、動植物、登山医学・医療、技術書（登山・岩登り・氷雪・スキー・沢歩き・釣り・野外活動）、芸術書（絵画・写真・歌・料理）、個人エッセイ、遠征報告書まで、まさに多種多様な山岳書が集められている。

また全国には33の支部があり、これら地方支部の会報・記念誌もすべて所蔵されている。当会だけでなくほかの山岳組織の資料、たとえば日本山岳・スポーツクライミング協会や日本勤労者山岳連盟傘下の山岳会の年報・会報・記念誌、学校山岳部やワンダーフォーゲル部の部報なども収蔵されている。特に遭難に関する追悼号や遺稿集など、通常ではなかなか手に入りづらい書籍、資料類も保管・管理されている。

蔵書数は、和書で約1万2000冊、洋書で約3000冊にのぼる。やはりヒマラヤなどの山岳地や極地に



開架式になっている日本山岳会図書室

に特化した書籍が多く、その蔵書の数や内容からいっても、日本で唯一の「山岳図書館」といわれるゆえである。

その図書の分類方法であるが、通常、図書の分

類は国内図書館では「日本十進分類法 (NDC)」が一般的だが、蔵書が「山」に特化した日本山岳会の場合、このNDCでは偏りが強すぎて分類にならない。そのためこれまでいくつかの試行錯誤を繰り返して、現在の日本山岳会独自の分類法に定着させてきた。まず書籍内容を「地域別」と「テーマ別」に大きく2分し、そこから各項目に細分化された計4桁の数字で表示している。

●寄贈書に特徴

図書室の書籍のなかでも特に貴重と思われるのが、和書の古典であり多様な洋書にあるといえるだろう。さらにそのほとんどが会員からの寄贈によって成り立ってきた歴史がある。個人名がついた寄贈図書の蔵書群が三つあり、図書室の「お宝」となっている。古い順に挙げてみよう。

まず「磯野記念文庫」がある。58歳という若さで亡くなった磯野計蔵は大変な愛書家で、山に限っても『山岳』全巻、志賀重昂の『日本風景論』初版本、小島烏水の『日本アルプス』全4巻など、特装本、限定本などが特に多かった。また洋書でもスヴェン・ヘディンの『トランスヒマラヤ』初版本、エドワード・ウィンパーの『アルプス登攀記』初版本など貴重な書籍が寄贈されている。1968年、「磯野記念文庫」として、182冊保存されている。

続いて「山崎安治登山史文庫」。戦後、復員した山崎は、日本登山史の資料収集とその叙述に精魂を傾けられ、その成果は『穂高星夜』『剣の窓』や『日本登山史』などの著作に表われている。研究のために集めたその膨大な蔵書が夫人によって日本山岳会に寄贈され、主に国内の地誌と登山史関係の書籍を中心に277冊に厳選されて、1985年「山崎安治登山史文庫」として保存されている。

次に日本山岳会の名誉会員でもあった望月達夫の「望月達夫文庫」がある。望月も大変な愛書家で、特にヒマラヤ、中央アジア関係の貴重な洋書を多数集めており、寄贈してもらったものだ。250冊に及ぶ洋書は、山岳会の図書室でなければ閲覧できないものが多い。W. M. Conwayの“CLIMBING IN THE HIMALAYAS”は、この山域の古典的名著で、こうした洋書がずらりと並んでいる。ただ、その価値がどこまで理解されているか、洋書そのものへのハードルも高いだろうが、貴重な「お宝」であることは間違いない。1987年、「望月達夫文庫」として250冊保存されている。

●世界各地の山岳雑誌

こうした「望月達夫文庫」のように、ヒマラヤ、カラコルム、アルプス、中央アジア周辺の洋書の数々は、質・量ともにほかの図書館ではなかなか見られないものばかりである。

と同様に、世界各地の山岳会の会報も充実している。特にイギリスの『アルパイン・ジャーナル』やインドの『ヒマラヤン・ジャーナル』はもちろんのこと、西欧各国の山岳会の会報がそろっているのも日本山岳会ならではのことであろう。

しかし、今回のコロナ禍によって、懸念される事態も生じてきた。各国山岳会の報告書などが資金難から、電子配信のみへと移行し、紙媒体として記録が残らない可能性が出てきているからだ。

●図書委員の先輩たち

問題はそればかりではない。日本山岳会の図書室はすでに飽和状態にあり、蔵書スペースの確保が喫緊の課題となっている。また会員の高齢化によって、図書の保存ができず貴重な山岳書が古書店に流出したり廃棄されたりするケースも散見されるようになってきた。本来であれば山岳会の図書室が、そうした図書の受け皿になるべきであろうが、現状の限られた収蔵スペースではそれも難しい。

先に挙げた電子化への要請も、喫緊の課題と言えよう。電子化自体は奨励されるべきであろうが、電子書籍だけでは重要な記録として残らない可能性があり、記録が残らなければ次世代に引き継がれる文化の継承もままならないからだ。

ただ、これまで長年にわたって図書室を支えてきたのは創立当初の愛書家たちであった。名誉会員の松方三郎、藤島敏男ら先人たちは、なによりも山岳書への愛着が強く、資金的にも人的（マンパワー）にも支援をしつづけてくれた。また図書委員会には、作家の深田久弥、山岳史研究家の山崎安治、小林義正、登山家の望月達夫、マナスル隊員だった松田雄一、作家の近藤信行など、そうそうたる顔ぶれがそろっていた。彼らが図書室を支えてくれたおかげで、貴重な山岳書が保存されつづき、次世代へ引き継がれてきた。その意味で図書室1番の「お宝」は、彼ら先輩諸氏の「ソフト」にあるといっても過言ではないだろう。

(かみなが みきお：日本山岳会図書委員会委員長)
[NDC10：090 BSH：1. 稀書 2. 日本山岳会図書室]

図書館員のおすすめ本⑧2

監視カメラと閉鎖する共同体 敵対性と排除の社会学

朝田佳尚著 慶應義塾大学出版会 2019 ¥4,000 (税別)

鉄道車両で乗客が襲われる事件が相次いだことを受け、2023年6月に国土交通省は利用者数が一定の水準を上回る地域で鉄道車両に防犯カメラ設置を義務付ける方針を決めた。

既にその名称からも防犯上必要不可欠なツールとして認められているように思えるが、本書における商店会の監視カメラ設置の過程から明らかになるのは、自己撞着する当事者による語りだ。設置を最初に提案した理事が最後まで確認できない事例や、外部からもちかけられた助成金が発端となり、何らかの不安に後押しされて設置計画が進められる様子を当事者へのインタビューを通して明らかにしている。

監視カメラは設置すればいつかは逸脱行為を撮影することになり、何か問題となる行為が映し出されたときには監視という役割を果たしたとされる一方で、何も事件が起きなければ防犯としての役割を果たしたと説明される。事件が起れば防犯という役割を果たしていないはずだがその点は無視される。結果が妥当なときは受け入れ、問題のあるときは論点をずらすことで監視カメラは必ず効果のあるものになる。当事者たちの語りを読むと、身の回りにも似たようなことがあるのではないかと不安に陥るほど、その語り口は饒舌だ。

同時には成り立たない二方向の解釈を成立させる機制を、アフリカ中央部に暮らす部族が行うト占トせんの事例に類似性をみる著者独自の視点も面白い。さまざまな解釈が可能な映像から問題の場面のみ反復して映し続ける監視カメラは、「ト占以上にト占らしい装置」(p.127)と指摘する。

地域社会における監視カメラ設置をめぐる「反省なき自己撞着」(p.169)を指摘する一方、目的化した監視カメラ設置を反省的に捉え直す動きを包含していることを指摘する本書は、よくある監視社会批判とは異なり考えさせられる一冊だ。

(新屋朝貴：公益財団法人三康文化研究所附属三康図書館)

自分をたいせつにする本

服部みれい著 筑摩書房 (ちくまプリマー新書) 2021 ¥920 (税別)

「自分をたいせつに」という言葉はよく聞くが、「じゃあどうやって、たいせつにするの?」と問われると、具体的な方法はほとんど知らずに大人になったことに気づく。

本書はその「自分をたいせつにする」方法について10代向けにやさしく解説された本であるが、「私たち大人こそ知っておいた方がよいのでは?」と思わずにはいられなかった。私は昭和生まれ、田舎育ちだが、「自分をたいせつにする」方法なんて親や学校からも教えられたことがない。それどころか逆に、「自分に鞭打って厳しく」「がんばらなくてはいけない」「迷惑をかけてはいけない」と教え込まれてきた子ども時代じぶんふうだった。幼いころから、著者の言うところの「自分風」の着ぐるみを着つづけ、世間の価値観や固定観念でダルマ状態になり、自分を大切にせぬまま大人になったような気がする。

そんな大人のために (または若者がそうならないように)、本書では「自分をたいせつにする」ための具体的な方法やワークが豊富に紹介されている。どれも身近で簡単な方法ばかりである。特にページ後半の「からだをたいせつにする」「こころをたいせつにする」「わたしをたいせつにする」の3種類のワークは必見。悲しく大変なときこそ、自分が自分の味方 (拠り所) でいよう、自分を見つめ直そう、と思えるようになるから不思議だ。

著者は、「ひとりひとりが自分をたいせつにして、ほんらいの自分に戻ることが、自然やまわりの人をたいせつにすることにつながる」(p.15)と説く。「自分をたいせつにする」ことは、利己的、自己中心的なものではなく、むしろその逆であり、自然環境や社会が大きく変化している今だからこそ必要なのだと。私も著者のように心地よく変わりたい、と強く思った。そして必要な人があれば、本書を手渡していきたいと思う。

(高橋和加：鳥取県立鳥取東高等学校)

図書館員のおすすめ本⑧

差し出し方の教室

幅允孝著 弘文堂 2023 ¥2,900 (税別)

「人が本の場所に来ない時代」に「人がいる場所へ本を持っていく」ことを提案し、ブックディレクターとして活躍してきた著者が、選んだ本をどう差し出すかについて考えた1冊。前半は本に限らず、“差し出すこと”のプロフェッショナルとの対話、後半は自身の仕事を振り返る。最良な状況は、「読め、読め」という圧を感じさせることなく「気がついたら読んでいた」という状況を作ることだという幅さんの言葉には共感しかない。

動物園の使命は動物を見ることの楽しさや、見ることによって新しい発見に気づいてもらうことだという。「動物」を「本」に、「見る」を「読む」に置き換えれば、共通項が見えてくる。たとえば動物園で最も人気のパンダ舎をどこに置くかで人の流れは変わる。また、コアラのケージの前に座り心地のいい椅子を一脚置いてみると時間の過ごし方が変わる。生態を見ることで問いが生まれる。

Web世界を熟知するプロの現在の関心事は、デジタルとフィジカルの融合だという。すでに視線はデジタルvs紙の対立構造を超えた先にある。ひとり一台の端末の時代となった学校では、調べることは端末で行う児童・生徒が増えるのは当然のことだろうが、すべてネットの情報で事足りると思っている教員も少なくない。学校司書の私は思うーデジタルとフィジカルが融合する場所として「学校図書館」ほど最適な場所はない。

名ソムリエは、ワインの前で自分をどれだけ消せるかが大事だという。司書もその本の魅力を声高に伝えるだけでは、生徒の心には届かないことを知っている。病院の待合室につくった本棚は、本=良品ものという暗黙知を壊し、読んでも読まなくてもいいという距離感を大事にしている。

「読め」という圧から解放され、気分しだいでも自由に本を手にとれる空間は居心地がいい。「あらゆるコンテンツを扱うスマホ」vs「本」ではなく、そこから「本」につながる回路を探したい。

(村上恭子：東京学芸大学附属世田谷中学校)

文明開化に抵抗した男佐田介石 1818-1882

春名徹著 藤原書店 2021 ¥4,400 (税別)

人物について調べ、評伝を書いてみたい、と相談をされたときに紹介できる本として、頭の中にストックされたのが本書である。情報が限られた人物であっても、丁寧な調査により479ページという分量になること、当該人物に肩入れしすぎず観察する姿勢を保つこと、現在から過去を見つめる視点と、その人が生きた時代に寄り添う視点を合わせ持つこと。先人の著作から切り貼りして感想を添えるのが研究ではないということを、改めて教えられたようだった。

本書で「孤独な異端者」と紹介された佐田介石は、文政から明治まで、まさに文明開化の時代を生きた僧侶・思想家である。書名にあるとおり、文明開化に抵抗し「天動説」や「ランプ亡国論」といった保守思想を貫く様子には、滑稽なようで笑えない、何とも言えない寂寥のようなものが感じられる。この時代、矛盾や問題を抱えながらも、市井の人は社会の変化を受け入れざるを得なかったのだらうことは想像に難くない。そこで大勢になびかずに、自分の考えを開陳する人物、それが佐田介石だった。彼の不可思議な保守思想を目の当たりにした人は、文明開化の「過渡期を生きる者の宿命ともいべき不安」を見せつけられたような気分ではなかったか、という指摘には、はっとさせられた。現代において、LGBTQ、同性婚、選択的夫婦別姓などを受け入れがたいとする人の言動に触れたときの感覚に似ているかもしれない。

巻末には関連地図、系図、年譜、佐田介石建白一覧、佐田介石著作一覧も付されており、今後の研究者にとってありがたいギフトも揃っている。文明開化について調べている方にも紹介できるように、覚えておきたい本である。

(山下樹子：神奈川県立図書館)

[NDC10：019.9 BSH：書評]



図書館雑誌では、「北から南から」欄への会員のみなさまからの投稿をお待ちしています。館界や本誌へのご意見、個人やグループなどの活動報告、研究成果、また、日常業務の中で工夫していることなどを、下記の要領でお寄せください。

★字数：1200～3800字程度（図版・写真を含む）

★送り先：〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14

日本図書館協会 図書館雑誌編集委員会「北から南から」係
(FAX (03)3523-0841でも受け付けいたします)

「文献宇宙」の思潮を今に語り継ぐ

— 図書館学の祖と称されるピアス・バトラーのこと —

天谷真彰

1. ことば「文献宇宙 literary cosmos」との出会い

図書館情報学研究者の村田修身^{むらたおさみ}氏から「文献宇宙」を冠した姉妹編になる2冊目の著書が刊行された。事情があつて初めに、当時の最新研究をまとめた妹編の『文献宇宙とライブラリアン：図書館にできることを探る』（福島図書館研究所・渡邊武房、2015.3）が出て、今回、村田自身の図書館学の基礎理論的な姉編の『文献宇宙：その生成と進化』（同研究所、2023.4）の発行となった。

村田が、この「文献宇宙」という言葉を初めて知ったのは1960年、図

書館学を学び始めたところで、質問事項があり研究室を訪ねたとき、恩師小倉親雄（1913-1991、当時、京都大学教育学部図書館学講座助教授）からであった。

「先生が『文献宇宙』について話して下さった。その時のお話の内容は、残念ながらいまでは全く思い出せない。（メモもしていなかった。）ただ、『文献宇宙』という語が心に響いて『図書館学を学びたい』という気持ちが強くなって、図書館学の研究を続けていくことができた」と書いている。ここで余談になるが、本稿の筆者天谷も最初に図書館学を学んだのは1967年の小倉親雄先生の「図書館概論」からである。天谷は先の妹編の発刊時から「文献宇宙」という言葉に関心があり小倉親雄著『アメリカ図書館思想の研究』（日本図書館協会、1977）や学部研究紀要などをあたるとともに、広くこの名辞「文献宇

宙」の出典の調査を進めていた。今年4月、図書館記念日に近い週末に彦根市立図書館で「文献宇宙」という言葉にたどり着いた。数少ない情報から知り得た結果の大きさに驚き、同時に頭脳内を図書館学史を飾った人物像が回転して蘇ってきた。

2. 「文献宇宙」で示された概念について

さすがは専門用語辞典である。判明したのは『最新図書館用語大辞典』（図書館用語辞典編集委員会編、柏書房、2004）での項目「文献宇宙」である。

本稿では言葉の定義や概念を表すものであり、厳密さを期すため出典の表記どおり記載したい。

「文献宇宙」 literary cosmos

図書館の本質論として過去のあらゆる文献が整然と組織化された状態をさす。大量の文献資料の存在を宇宙になぞらえるとともに、人類の進歩は知的文化財である文献資料の蓄積にあるとし、文献資料を混沌（カオス chaos）とした状態に放置しておくのではなく、整然と秩序ある統一体として考える宇宙（コスモス cosmos）の状態にすることこそ図書館の任務であるとする図書館思想。ピアス・バトラー（Pierce Butler 1886-1953）により提



唱された（上記『大辞典』の499ページから）。

また、同辞典の560ページに「リテラリーコスモス literary cosmos」の項目がある（紙面の関係で解説文の概略を記す）。

リテラリーコスモスは、日本では「文献宇宙」として使用されている。本来はバトラーが“Library Quarterly”（Vol.22, 1952）に寄せた論文「The Cultural Function of the Library」で使用された用語である。また、「リテラリー・ユニバース」とも述べられている。「リテラリー・ユニバース」とは、いわば、理念として巨大な文献集積体を意味するとし、この後の記述については、前述の「文献宇宙」の項目で解説された同様の内容が別の言葉をもって記されている。

バトラーの主著の『図書館学序説』（An Introduction to Library Science, 1933）にも「文献宇宙」の思潮を見ることができる。「図書とは人類の記憶を保存する一種の社会的メカニズムであり、図書館はこれを生きている個人の意識に還元するこれまた社会的な一種の装置といえる」（藤野幸雄訳『図書館学序説』日本図書館協会、1978のp.23から）と文化・学識の継承発展の場としての図書館の意義を主唱している。バトラーは、1931年にシカゴ大学大学院図書館学研究科の教授となり、近代図書館の哲学に基づく多くの社会システムの構築を主唱し、図書館学理論の確立に尽力し『図書館学』、『図書館情報学』の祖とよばれている。

3. 社会の動きを読み解くバトラーの思索と理論の源泉

バトラーの偉大さを感じるところは「社会の動きが、図書館のあり様

を変える」といい、それぞれの時点の状況下で構想した最適なモデルを示し続けてきた。単なる先見性ではなく哲学的で歴史学的な社会学の研究手法を駆使して、広い視点からのアプローチがなされてきた。発揮されるバトラーの力の源泉を筆者なりに畏敬の念をもって考えると、広く専門的な知識力と構想・行動力の総合的な資質を持ち合わせていることと言える。例えばその第一は、図書館学・分析書誌学・書物文化史・学識史などの専門で学術的な知識を有し、加えて大きな構想力を持っていたこと、その第二には、当時の図書館人・図書館実務教育主唱者から多くの批判があったにも関わらず、図書館学のために社会科学の修得の必要を説く信念と行動力を持っていたことなどが挙げられる。

さらに研究への視点については、21世紀初頭に聖学院大学の研究者若松昭子によって解明されてきたように、バトラーの1925年のニューベリー図書館所蔵インクナブラ展示会の開催に関する論考3点（『図書館学会年報』44-1, 1998。「日本図書館情報学会誌」46-4, 2001。「聖学院大学論叢」18-3, 2006）および若松著「ピアス・バトラーの図書館学における理論と実践」（日本図書館文化史研究会編『図書館人物伝－図書館を育てた20人の功績と生涯』p.347-366, 日外アソシエーツ, 2007）らの研究において、「バトラーの展示法・文化史的な観点には、メディア論としての新しい時代の書物史研究の視座と共通する姿勢がみられる」と論じられている。

4. 今に語り継ぎたい「文献宇宙」とバトラーのこと

言葉の出典が判明した今、1957年に米国へ留学した恩師小倉親雄が村



田に教えた「文献宇宙」の言葉と概念はバトラーの理論であることが確認できた。村田本にはバトラーの理念を伝える論考が序章「文献宇宙の発生」から展開・構築されており、第5章「民主主義の砦」～新しい時代の図書館」などに新たな展開、具現化へと広がり図書館情報学の教科書としても優れている。

20世紀の情報革命で招来した情報化社会では、望めばバーチャルで「文献宇宙」の世界を可視化することも可能となろう。今年3月、国文学研究資料館が江戸時代以前の日本のあらゆる分野の古典籍をデジタル画像で無料公開を始めたことなどに、「文献宇宙」のあらたな広がりを感じる。

社会と図書館の関係を究明する原点は、熟考するとバトラーの視点であることに変わらない。多くの図書館関係者に時には思索と理論の大切さを考え、バトラーや「文献宇宙」の思潮のことを語り合っていたいただきたいものと願っている。

（あまたに しんしょう）

滋賀図書館情報学研究所

[NDC10：010 BSH：図書館情報学]



日図協図書館 新着案内

●配列と記載事項について

単行書：『日本十進分類法』による分類記号順（NDC 記号順）とし、同一分類記号内は書名の欧文、数字、五十音順とした。

「タイトル 巻次 著者 出版社 出版年月 ページ数 大きさ（叢書名） 注記 ISBN 価格 NDC 記号」

要覧：館種別、都道府県（県、政令指定都市・特別区、市、町村）順

「タイトル 巻次 編者・出版社 出版年月 ページ数 大きさ」

館報：館種別、都道府県（県、政令指定都市・特別区、市、町村）順

「タイトル 巻次 編者・出版社 出版年月」

機関誌・団体報：館種、テーマによる NDC 記号順

「タイトル 巻次 編者・出版社 出版年月 ページ数 大きさ 注記 NDC 記号」

記事索引：『日本十進分類法』による分類記号順（NDC 記号順）とし、同一分類記号内は記事タイトルの欧文、数字、五十音順とした。

「記事タイトル 著者 掲載誌 巻号 掲載ページ 掲載年月」

図書館関係 図書・資料・記事目録



単行書 紀要掲載論文

報告書・資料集・論文集など

Scholarly communication what everyone needs to know

Rick Anderson 著 Oxford University Press 2018
xiv, 280p. 21cm 978-0-19-063945-7 002

図書館情報学事典 日本図書館情報学会編 丸善出版

2023.07 726p 22cm 978-4-621-30820-2 ¥20000
010.36

図書館年鑑 2023 日本図書館協会図書館年鑑編集委員

会編 日本図書館協会 2023.07 507p 26cm 図書

館関係資料：新型コロナウイルス感染症関連資料、

ほか 978-4-8204-2302-7 ¥18000 010.59

PASSION 38 金剛株式会社 2016.11 40p 30cm 平成28年熊本地震 平成28年熊本地震震災資料を次世代へ 災害から生まれるもの-新たな郷土史の萌芽(宮脇薫子)、「図書館のプロ」として地に足ついた復旧作業、地震から得た学び、日常業務の延長線上に見えた、災害時の図書館の役割、県下図書館の被災・復旧の概況と今後の教訓について、被災文化財の救援「IPM」から「防災・危機管理」へ被災文化財を救う県境を越えた平時のネットワーク、熊本に息づく郷土史への自負心 熊本史料ネットと被災文化財救援事業、熊本地震を通じて見えた公文書保全の課題と展望 012

PASSION 39 金剛株式会社 2017.11 43p 30cm 災害を越えて-未来をつくる記録の力 巻頭特集 防災・災害情報の水先案内人、巻末特集 東日本大震災から6年、防災専門図書館～防災・災害情報の水先案内人、長岡市立中央図書館文書資料室「互尊独尊」の精神を宿す長岡の「ふみくら」、益城町図書館震災資料で益城に復興の灯を、阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター資料室 震災アーカイブの先駆け神戸の教訓に学ぶ、和歌山県博物館施設等災害対策連絡会議 災害の記憶を未来へつなぐ「懸け橋」として、宮城県 継続する覚悟、寄せられる資料への責任、石巻 NEWSee 未来への発信 時を経て見えてきたもの 012

Practical cataloguing AACR, RDA and MARC 21

Anne Welsh, Sue Batley 著 Facet Publishing
2012 xvi, 217p. 24cm 978-1-85604-695-4 014.32

サクサク書ける！良いレポート・卒論 プロの情報リサーチ術「文献調査法から入手法まで」毛利和弘著 DB ジャパン 2023.07 72p 21cm (DBJ Booklet 2) 978-4-86140-364-4 ¥1200 015.2

文献調査法 調査・レポート・論文作成必携（情報リテラシー読本）第10版 毛利和弘著 DB ジャパン
2023.06 212p 26cm 978-4-86140-366-8 ¥1800 015.2

「図書館」のないときから、あるときへ 住民とともに歩んだ大阪支部の55年 図書館問題研究会大阪支部 55年史編集委員会編 図書館問題研究会大阪支部
2023.06 129p 30cm ¥1200 016.206

神奈川県学校司書等実務研修研究活動報告書 令和4年度
神奈川県教育委員会 2023.05 140p 30cm 特集：
学校図書館と進路支援，冬季全体研究会報告「学習
支援としての教員への働きかけ－プチ実践やってみ
た」「つなぐ，しめす，どうぐらむ」「図書館に人を
呼ぶ！Part 2－呼べないときは？」講演「学校図書
館の機能を教育に生かす－教室内外の学びと情報を
つなぐために」（庭井史絵），かながわ学校図書館員
による生徒のための本 2022（令和4）年度，LibMax
と神奈川県立学校図書館（田子環） 017

読書と豊かな人間性 金沢みどり著，河村俊太郎著 雪
嶋宏一［シリーズ監修］ 勉誠社 2023.08 276p 21
cm（ライブラリー 学校図書館学 1）出版者は奥
付による 978-4-585-30401-2 ¥2500 017

著作権テキスト 令和5年度版 文化庁著作権課 [2023]
109p 30cm 021.2

Open access Peter Suber 著 MIT Press 2012 xii,
242p. 18cm（The MIT Press essential knowledge
series）Includes bibliographical references（p.[177]
-221）and index 978-0-262-51763-8 023

オックスフォード出版の事典 A.Phillips, M.Bhaskar 編
植村八潮［ほか監訳］ 丸善出版 2023.01 506p
22cm 原タイトル：The Oxford Handbook of Pub-
lishing 他の監訳者：柴野京子，山崎隆広 978-4-
621-30792-2 ¥24000 023

小学館の一〇〇年 1922→2022 小学館100周年事業室編
小学館 2023.08 566, 127p 27cm 付録：「セウガ
クー年生」（第1巻第1号）の復刻版 978-4-09-6713
04-4 023.067

おすすめ！日本の子どもの本 JBBY 選 海外にも紹介
したい子どもの本 2023 日本国際児童図書評議会
（JBBY） 2023.06 23p 26cm 資料①国際アンデ
ルセン賞 受賞者と候補者 資料②日本のIBBY オ
ナーリスト 023.09

おもしろい本な～い？ おすすめブックリスト 令和5年
度 ブックリスト専門委員会会津支部編 福島県高
等学校司書研修会 2023.07 28p 30cm 分類別索
引あり 028

文部科学白書 2022 令和4年度 文部科学省 2023
37p 30cm 特集1「令和の日本型学校教育」を担
う教師の養成・採用・研修等の在り方について 特
集2 未来をけん引する人材の育成～大学・高等専門

学校の機能強化と学び直し促進～ 317.27

認知症にやさしい健康まちづくりガイドブック 地域共
生社会に向けた15の視点 今中雄一編著 武地一
[ほか] 著 学芸出版社 2023.03 185p 21cm 978-
4-7615-3290-1 ¥3000 369.26



要覧

年報・年史・業務報告・利用案内など

札幌市の図書館 2023 札幌市中央図書館 2023.08 84p
30cm

訓子府町図書館要覧 令和5年度版 訓子府町図書館
2023.07 31p 30cm

つくば市の図書館概要 令和5年度（2023年度）つくば
市立中央図書館 2023.08 30p 30cm

水戸市立図書館要覧 令和5年度 水戸市立中央図書館
2023.07 84p 30cm

県民の図書館 栃木県立図書館要覧2023（令和5年度）
栃木県立図書館 2023.06 39, 10p 30cm

要覧 令和5年度 千葉県立中央図書館・千葉県立西部図
書館・千葉県立東部図書館 2023.06 79p 30cm

藤沢市図書館概要 令和5年度 藤沢市総合市民図書館
2023.08 76p 30cm

要覧 2023 大阪府立中央図書館 2023.06 28p 30cm
図書館要覧 令和4年度（2022年度）27 泉佐野市立図
書館 2023.07 49p 30cm

斑鳩町の図書館 令和4年度 斑鳩町立図書館 2023.06
32p 30cm

要覧 令和5年度 広島県立図書館 2023.06 32p 30cm
図書館要覧 令和5年度（2023年度）オーテピア高知図
書館（高知県立図書館・高知市立市民図書館） 2023.
06 150p 30cm

要覧 令和5年度 長崎県立長崎図書館 2023.06 34p
30cm

昭和館報 令和4年度 昭和館 2023.07 47p 30cm

2022年度報告書／2023年度事業計画書 2022/23 日本国
際児童図書評議会 [2023.07] 43p 26cm



館報 協会報 機関誌

●日本図書館協会

図書館雑誌 The Library Journal 117(8) (通巻1197)

日本図書館協会図書館雑誌編集委員会 日本図書館協会 2023.08 112p [440-552p] 26cm 通巻1197号 特集 図書館と展示－資料から広がる世界「レファレンス」が拡張するとき(大作光子)(窓), 文部科学省,「教育振興基本計画」を公表(NEWS), 活字文化議員連盟, 学校図書館議員連盟が合同総会開催(NEWS),「読書バリアフリー環境に向けた電子書籍市場の拡大等に関する調査報告書」公表(NEWS), 災害等により被災した図書館等への助成(2023年度)について(NEWS), 速報 都道府県立図書館と政令指定都市の図書館の2023年度資料費予算額(NEWS), 日本図書館協会資料保存委員会「動画でみる資料保存」を開設(NEWS), サーマルカメラの記録の点検を(こらむ図書館の自由), 第39回日本図書館協会建築賞, 子供の読書活動の推進等に関する調査研究(電子図書館・電子書籍と子供の読書活動推進に関する実態調査)(霞が関だより 237), 都道府県図書館の統計『日本の図書館』2023年調査票より(数字で見る日本の図書館 85), 古典書籍の多い図書室(東京医療福祉専門学校図書室より)教員と司書と学生。おのおのからみる図書室のあり方(小規模図書館奮戦記 その304 東京医療福祉専門学校図書室), 福岡市総合図書館のレファレンス(れふあれんす三題噺 303 福岡市総合図書館の巻), 湧川文庫 ハワイから沖縄への贈りもの(ウチの図書館お宝紹介! 234 名桜大学附属図書館), 図書館員のおすすめ本 80, 2023年度通算第1回(定時第1回)理事会議事録, 2023年度通算第1回(定時第1回)代議員総会議事録, 2023年度通算第2回(定時第2回)理事会議事録, 2023年度部会総会議事録, 配付資料, 2023-2024年度委員会委員名簿, 公益社団法人日本図書館協会代議員定数等検討委員会報告書, 日本図書館協会建築賞(第40回)応募要項(綴込), 第109回全国図書館大会岩手大会(要綱)(綴込) 0105
日本の参考図書 四季版 '23.04-06 228 日本図書館協会 2023.08 44p 26cm 028

●国立国会図書館

レファレンス 872 国立国会図書館調査及び立法考査局 2023.08 103p 30cm 016.11

●協会報・館報

よむみる 370 恵庭市立図書館 2023.08

情報図書館だより 2023年8月 400 江別市情報図書館 [2023.07]

図書館通信 42(5) 507 登別市立図書館 2023.08

ハトダヨ 函館市中央図書館だより 87 函館市中央図書館 2023.08

まなベル 生涯学習情報誌 2023年(令和5年)8月号 352 訓子府町教育委員会 2023.08

花さき山 筑西市立明野図書館報 430 筑西市立明野図書館 2023.08

図書館だより 471 新座市立図書館 2023.08

東京都図書館協会報 103 東京都図書館協会 2023.07
内容: 令和4年度総会報告, 令和5年度総会資料概要, 協会(TLA)からのお知らせ

ひばり いなぎ図書館だより 206 稲城市立図書館 2023.08 内容: 稲城市立図書館50周年記念事業

ひろば 日野市立図書館館報 288 日野市立中央図書館 2023.08

図書館だより Ⅲ-25 25 武蔵野市立図書館編 武蔵野市立図書館 2023.07

マーメイド通信 151-152 逗子市立図書館 2023.06-08

新潟県図書館協会報 256 新潟県図書館協会 2023.07

ソフィアだより (2023年夏号) 2 ソフィアセンター(柏崎市立図書館) [2023.08] ソフィアお知らせ版 2023年8月

パピルス 上越市立図書館だより 305 上越市立図書館 2023.08

図書館だより 221 磐田市立図書館 2023.08

かけがわ図書館だより 222 掛川市立図書館 2023.08

ムクムク 449-450 四條畷市立四條畷図書館 2023.06-07 付 新着図書案内, ひとりでウフフみんなであハハ

としょかんだより 480 寝屋川市立中央図書館 2023.08

みんなの本だな 図書館だより 658 芦屋市立図書館 2023.08 内容:「エルマーのぼうけん」邦訳60周年!

しずく通信 232 猪名川町立図書館 2023.08 しずくつうしん for KID'S 172

図書館だより 354 岩国市中央図書館 2023.08

コトノハ (2023年7月号) 13 オーテピア高知図書館 2023.07

図書館おおいた 学びの四季報 303 大分県立図書館 2023.06

温故知新 静岡文化芸術大学図書館・情報センターだより 42 静岡文化芸術大学図書館・情報センター
2023.07 内容：知っていますか？こんなサービス
学生購入希望（リクエスト）

木野通信 京都精華大学 広報誌 80 京都精華大学
2023.07 内容：京都国際漫画ミュージアムレポート

●機関誌・団体報

情報の科学と技術 73(8) 情報科学技術協会 2023.08
50p [311-360p] 30cm 内容：特集 サブスクリプ
ションサービスが社会に与えた影響 転換契約への
移行と大学図書館コンソーシアム連合（JUSTICE）
のオープンアクセスに関する取り組み（大学図書館
コンソーシアム連合）、公共図書館における電子図書
館サービス：「ひがしおおさか電子図書館」の活用事
例（河井良太）、図書館における書影等の利用（連載
実務者のための著作権お悩み相談室 2）、『図書館資
料の保存と修理 その基本的な考え方と手法 眞野
節雄講義録』（書評・新刊紹介） 007

LRG：ライブラリー・リソース・ガイド 44 アカデミ
ック・リソース・ガイド 2023.08 155p 21cm
2023年夏号 内容：特集 図書館×公園 対談 図
書館と公園の関係性（根本彰，町田誠），Park-PFI
とは？制度と公園を取り巻く変化（小林舞衣），事例
「図書館×公園」の実践（小林舞衣），事例1新宿区
立中央図書館「そらとだいちの図書館」，事例2福山
市中央図書館，事例3みどりの図書館 東京グリー
ンアーカイブス，インタビュー 公園をつくる人，
インタビュー1 市民とともにつくる公園整備のプロ
セスについて（忽那裕樹），インタビュー2 まち
のくらしや文化を感じる公園（村上豪英），インタ
ビュー3 災害時に必要な都市の余白（鈴木光），座
談会 板橋区立中央図書館の整備プロセスについて，
付録 公園の大きさ比較，自由学園 1（藤代裕之）
（「らしさ」の設計論 3），議会図書室 機能強化の
ヒント [後編]（天野奈緒也），「図書館の可能性を広
げる」本との出会いや体験の場（猪谷千香），公園内
にある／隣接している図書館はどれくらいあるの
か？ーデータから検証！……できなかった。すべての
の公園が円じゃないので（佐藤翔） 010

日仏図書館情報学会ニュースレター 241 日仏図書館情
報学会 2023.07 6p 30cm 010.7

もっと！TRC MARCpedia 4 図書館流通センターデー

タ部 2023.08 [4p] 30cm 内容：TOOLiを使い
こなそう！ 014

AJU 通信あけのほし 274（通巻14929）ログス点字図
書館 2023.07 16p 30cm 015.97

ってんフォーラム 2023夏 128 日本点字図書館
2023.07 16p 21cm 015.97

文庫だより 242 天理教点字文庫 2023.08 7p 30cm
015.97

としょかん 166 としょかん文庫・友の会 2023.08
19p 26cm 付：「図書館クビ 雇止めになりました」
（8P，問合せ：公務非正規女性全国ネットワーク（は
むねっと））内容：さばえ図書館友の会『さばえラ
イブラリーカフェ200回記念誌』（さばえライブラ
リーカフェ実行委員会2023）を刊行しました（北か
ら南からクローズアップ），地域の図書館を支え応援
する会の活動（美和図書館友の会 榎本仁），追悼
西川馨さん（西川七菜，畠山秀保，渡辺佳雄，組原
洋，座間直壯，潮平俊，片山睦美，藤原こずえ），図
友連シンポジウム「公共図書館はどう伝えられてい
るか～新聞ジャーナリズムと市民～」に参加して
（印西子どもの文化連絡会 柴田加寿子），関東大震
災100年 東京市立深川図書館を中心に（西村彩枝
子），「図書館クビ 雇止めになりました」（としょか
ん雑記帳），『税金で買った本』（本の紹介），公共図
書館の源流 大橋図書館 4（源流へ 64） 016.206
としょかん文庫・友の会通信 23 としょかん文庫・友
の会 2023.08 [6]p 26cm 内容：「としょかん文
庫・友の会」2023年度拡大世話人会報告 016.206

みんなの図書館 557 教育史料出版会（発行）2023.08
72p 21cm 9月号 内容：都道府県立図書館の役割
とめざすもの 第4次北海道立図書館事業推進計画か
ら考える（鈴木浩一），TSUTAYA 武雄図書館と街
の書店の今（堤洋），多賀城市立図書館と白河市立図
書館を比較する（森下芳則），学習会「公共図書館・
学校図書館で働く非正規雇用職員について」（山本祥
子，田邊佳香），日本というミミック社会の図書館
（職場）と図書館員養成教育の哀しさー平均値的体制
順応・盲従型凡人にあふれ，外れ値的秀才・天才が
出にくく，独創的商品・サービスを産み出しにくい
文化的レガシーが維持され続けるなかで（山本順
一），『LRG 第42号 2023年冬号』（ほん・本・
Book），学校図書館雑記（column：図書館九条の会）

- 016.206
 しぶほう 425 図書館問題研究会神奈川支部 2023.08
 8p 26cm 016.206
 大阪支部報 543 図書館問題研究会大阪支部 2023.08
 6p 26cm 内容：支部活動55年をまとめた『「図書館」のないときから、あるときへ』（巽照子） 016.206
 MOTTO 174 仙台にもっと図書館をつくる会 2023.07
 20p 26cm 内容：第39回総会・記念行事終わる 016.206
 よこはまライブラリーフレンド 75 よこはまライブラリーフレンド 2023.05 1枚 30cm 016.206
 図書館とともだち 220 図書館とともだち・鎌倉 2023.07 12p 30cm 添付資料：これからの鎌倉の図書館にのぞむ市民の提言書（案） 016.206
 図書館とまちづくり 156 図書館とまちづくり・奈良県・ネットワーク 2023.08 8p 30cm 内容：2023年度総会報告 016.206
 こどもとしょかん 178 東京子ども図書館 2023.07 35, xiii 21cm 内容：昔話を子どもたちに届けること―「子どもに語る」シリーズを出版して 行く手を照らしてくれた松岡享子さん（追悼 松岡享子） 016.28
 年次報告 2022年度 東京子ども図書館 2023.07 12p 30cm 内容：50周年を前にして、松岡享子さんに感謝する会、池田正孝先生に感謝する会、 016.28
 こどもの図書館 70(8) 児童図書館研究会 2023.08 16p 26cm 付：「児童図書館研究会2022年度一般会計歳入歳出決算」[ほか] 内容：特集 2023年度児童図書館研究会総会[報告] 016.286
 支部だより 440 児童図書館研究会神奈川支部 2023.07 12p 26cm 016.286
 学校図書館 874 全国学校図書館協議会 2023.08 88p 26cm 内容：特集 第5次「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」を読み解く 第5次「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」を読み解く（鈴木育乃）、すべての子どもたちに本の楽しさを（伊佐治裕子）、滋賀県の学校・公共図書館の現場から読み解く（井上勝）、本が好き・人が好き・まちが好き―「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」を学校図書館から読む（井上陽子）、すべての子どもが多様な学びを得られる学校図書館を創るには（上嶋千佳）、中学生の読書生活の日常から（福本尚子、渡邊光輝）、図書館界に吹きはじめた新しい風（松田ひとみ）、第5次「子どもの読書活動の推進に関する基本的計画」を特別支援学校の教員が読む（生井恭子）、知的障害のある人の読書を支援する―LLブック（教育時評 297）、子どもと本に橋を架ける―（きりり！学校司書 62）、『オックスフォード世界児童文学百科 新版』（役にたつ！Book Guide）、投稿 コピペ≠剽窃―読書感想文審査の前に（中野ひかる・今野創祐）、資料 公益社団法人全国学校図書館協議会 第42回理事会 議事録／2023年度（7月～2024／6月）事業計画（案）、第25回「学校図書館出版賞」選考報告（小林功） 017.06
 学校図書館速報版 2132-2133 全国学校図書館協議会 2023.08 2冊 26cm 内容：(2132) 第53回「学校図書館賞」等表彰式開催、公立校の図書費は、どのように決めるのですか？その1（教えて、先輩 Q&A） 017.06
 会報 52 日本学校図書館学会 2023.07 8p 30cm 付：令和5年度第26回日本学校図書館学会研究発表大会のご案内、「学校図書館活用の現状を知り、今後の活用への方策を求めて」アンケート調査（お願い） 017.06
 学図研ニュース 450 学校図書館問題研究会 2023.08 44p 26cm 内容：特集 各地の活動及び状況報告 計報「後藤暢さんとの思い出」 017.06
 図書館教育ニュース（付録） 1634 少年写真新聞社 2023.08 4p 26cm 017.1
 小学図書館ニュース（付録） 1302 少年写真新聞社 2023.08 4p 26cm 017.2
 大学の図書館 42(6)-(7) 595-596 大学図書館研究会 2023.06-07 [p66-92] 26cm 内容：(595) 大学図書館研究会 第54回全国大会開催要綱 017.706
 東京都美術館ニュース 475 東京都美術館 2023.07 15p 21cm 069
 博物館研究 58(8) 663 日本博物館協会 2023.08 62p 30cm 内容：特集 「レトロ・ノスタルジー展示の長所と課題」 069
- 出版・著作権
- コピライト 748 著作権情報センター 2023.08 80p 30cm 内容：第5回 非享受目的の利用（テーマで学ぶデジタル社会の著作権制度） 021.2

JASRAC NOW 日本音楽著作権協会会報 787 日本音楽著作権協会 2023.08 11p 30cm 内容:「生成AIと著作権の問題に関する基本的な考え方」を発表 021.23

アクセス 地方小出版情報誌 559 地方・小出版流通センター 2023.08 12p 26cm 023

書協 393 日本書籍出版協会 2023.07 6p 26cm 内容:図書館等公衆送信補償金 023

子どもと科学よみもの 2023年8・9月号 534 科学読物研究会 2023.08 20p 26cm 023.09

こどもの本 49(9) 612 日本児童図書出版協会 2023.09 52p 21cm 内容:42社の新刊167点掲載 023.09

日本古書通信 88(8) 1129 日本古書通信社 2023.08 47p 26cm 024.8

●生涯学習・地方自治ほか

市政 853 全国市長会 2023.08 66p 30cm 内容:KiCROSS(菊地市立図書館)写真掲載あり 318

社会教育 926 日本青年館「社会教育」編集部 2023.08 96p 26cm 内容:みんなの図書館さんかく(新・まちづくり探訪記 104, 山形市),第五次「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」について,子供の読書活動優秀実践校・図書館・団体(個人)表彰式を開催しました 379

月刊社会教育 67(9) 808 旬報社 2023.09 88p 21cm 内容:特集 社会教育職員として生きる 会計年度任用職員の不安定雇用について,全国の自治体に問うてみたーはむねっと1789プロジェクトから(渡辺百合子) 379

図書館関係 雑誌記事索引

010.1 図書館の自由

サーマルカメラの記録の点検を 鈴木章生 (こらむ図書館の自由) 図書館雑誌 p443 2023.08

010.6 日本図書館協会

災害等により被災した図書館等への助成(2023年度)について(NEWS) 図書館雑誌 p441 2023.08

2023-2024年度委員会委員名簿 図書館雑誌 p508-511 2023.08

公益社団法人日本図書館協会2023年度通算第1回(定時第1回)代議員総会議事録 図書館雑誌 p490-495

2023.08

公益社団法人日本図書館協会2023年度通算第1回(定時第1回)理事会・通算第1回(定時第1回)代議員総会・通算第2回(定時第2回)理事会配付資料 図書館雑誌 p512-536 2023.08

公益社団法人日本図書館協会2023年度通算第1回(定時第1回)理事会議事録 図書館雑誌 p484-489 2023.08

公益社団法人日本図書館協会2023年度通算第2回(定時第2回)理事会議事録 図書館雑誌 p496-497 2023.08

公益社団法人日本図書館協会2023年度部会総会議事録図書館雑誌 p498-507 2023.08

公益社団法人日本図書館協会代議員定数等検討委員会報告書 公益社団法人日本図書館協会代議員定数等検討委員会 図書館雑誌 p537-545 2023.08

012 図書館建築

第39回日本図書館協会建築賞 図書館施設委員会,八木佐千子文責 図書館雑誌 p474-477 2023.08

013.4 図書館の予算

速報 都道府県立図書館と政令指定都市の図書館の2023年度資料費予算額(NEWS) 図書館雑誌 p442 2023.08

014.1 図書館資料

図書館と司書の世界を知ってもらうための試み 文教大学越谷図書館「STARBOOKS」設置 藤倉恵一,池内有為(特集 図書館と展示-資料から広がる世界) 図書館雑誌 p457-459 2023.08

014.61 資料保存

日本図書館協会資料保存委員会「動画でみる資料保存」を開設(NEWS) 図書館雑誌 p441 2023.08

015.2 レファレンス ワーク

福岡市総合図書館のレファレンス 福岡市総合図書館(主題別部門・国際資料部門)(れふあれんす三題嘶 303 福岡市総合図書館の巻) 図書館雑誌 p478-479 2023.08

015.8 展示

国立国会図書館における展示のデジタルシフト「知りたい」を支援する情報発信 小川那瑠(特集 図書館と展示-資料から広がる世界) 図書館雑誌 p462-463 2023.08

周年事業における資料展示「あれから,百年 埼玉県立図書館百周年記念資料展」を例にして 小柳直士(特集 図書館と展示-資料から広がる世界) 図書

館雑誌 p464-465 2023.08

資料展示会の意義 企画する側から・見学する側から

菅修一 (特集 図書館と展示-資料から広がる世界) 図書館雑誌 p448-451 2023.08

千歳市立図書館「青葉の森の水族館」展示の試み 中川

伸明 (特集 図書館と展示-資料から広がる世界) 図書館雑誌 p466-467 2023.08

筑波大学附属図書館における電子展示のありかた 大久

保明美 (特集 図書館と展示-資料から広がる世界) 図書館雑誌 p460-461 2023.08

「東洋一」の夢 帝国図書館展 国際子ども図書館の建物

そのものを展示する 松井祐次郎 (特集 図書館と展示-資料から広がる世界) 図書館雑誌 p452-453 2023.08

防災情報を伝えるため、利用者に寄り添った展示づくり

防災専門図書館の展示紹介 矢野陽子 (特集 図書館と展示-資料から広がる世界) 図書館雑誌 p454-456 2023.08

016.21 図書館(公共)-日本

都道府県図書館の統計 『日本の図書館』2023年調査票よ

り JLA 図書館調査事業委員会 (数字で見る日本の図書館 85) 図書館雑誌 p470-472 2023.08

017 学校図書館

「レファレンス」が拡張するとき 大作光子 (窓) 図書

館雑誌 p440 2023.08

018.49 東京医療福祉専門学校図書室

古典書籍の多い図書室(東京医療福祉専門学校図書室よ

り) 教員と司書と学生。おのおのからみる図書室のあり方 谷直樹 (小規模図書館奮戦記 その304

東京医療福祉専門学校図書室) 図書館雑誌 p473 2023.08

019.5 読書

子供の読書活動の推進等に関する調査研究(電子図書

館・電子書籍と子供の読書活動推進に関する実態調査) 文部科学省(霞が関だより 237) 図書館雑誌 p468-469 2023.08

023 電子書籍

「読書バリアフリー環境に向けた電子書籍市場の拡大等に

関する調査報告書」公表 (NEWS) 図書館雑誌 p441 2023.08

023 活字文化議員連盟

活字文化議員連盟、学校図書館議員連盟が合同総会開催

(NEWS) 図書館雑誌 p441 2023.08

028 紹介本

『現地嫌いなフィールド言語学者、かく語りき。』『専門知

は、もういらないのか』『鬼と日本人の歴史』『日本語の発音はどう変わってきたか「てふてふ」から「ちょうちょう」へ、音声史の旅』小野桂, 高橋将人, 武藤尚子, 小曾川真貴 (図書館員のおすすめ本 80) 図書館雑誌 p482-483 2023.08

090 稀書

湧川文庫 ハワイから沖縄への贈りもの 渡具知伸 (ウ

チの図書館お宝紹介! 234 名桜大学附属図書館)

図書館雑誌 p480-481 2023.08

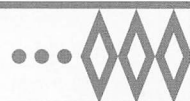
373 文部科学省

文部科学省,「教育振興基本計画」を公表 (NEWS) 図

書館雑誌 p441 2023.08



協 会 通 信



常任理事会

日時：8月24日(木) 14:00～14:55

会場：日本図書館協会504会議室・Web会議 (Webでの出席は「W」と記載)

出席常任理事：植松貞夫 (理事長), 鈴木隆 (副理事長), 岡部幸祐 (専務理事兼事務局長), 海老根裕 (専務理事), 植村八潮 (常務理事), 杉本重雄 (常務理事), 曾木聡子 (常務理事兼総務部長), 成瀬雅人 (常務理事)
列席理事：関根美穂 (国立国会図書館), 清水俊治 (公共図書館部会: W), 本木正人 (大学図書館部会: W), 深水浩司 (専門図書館部会: W), 高橋恵美子 (学校図書館部会), 久野高志 (短期大学・高等専門学校図書館部会: W)

列席監事：中山勝文

*

1. 会議成立要件の確認

岡部専務理事兼事務局長 (以下「事務局長」という) より, 議事に先立って, 会場及びZoom上の画面で本人の出席を確認し, 出席者が定足数を満たし会議が成立することが確認された。

2. 開会宣言・理事長挨拶

植松理事長 (以下「理事長」という) より, 開会が宣せられた。

*

(協議・報告)

1. 共催・後援名義の応諾について

以下の3件について承認した。

【後援】

・「第48回全国視覚障害者情報提供施設大会」(特定非営利活動法人全国視

覚障害者情報提供施設協会)

・「本の学校2023 プレストミーティング」(特定非営利活動法人本の学校)

・「令和5年度 第1回大阪公共図書館協会研修会」(大阪公共図書館協会)

2. 寄附金及び感謝状の贈呈について

以下の寄附金について, 承認した。

・2023年7月15日～2023年8月10日入金分

一般寄附金: 2件 33,000円

指定寄附金: 2件 2,000,154円

合計: 4件 2,033,154円

協力感謝状について, 2020年度から2022年度にかけて累計30万円以上の寄附があった個人3名, 団体1団体に贈呈することを承認した。

3. 新入会員の承認について

以下の新入会員について, 承認した。

・2023年7月31日現在

個人会員A 2名

個人会員B 1名

4. 報告事項

(1) 令和6(2024)年度予算における図書館関係地方交付税について

事務局長より, 説明があった。

前回の常任理事会で審議された, 令和6(2024)年度予算における図書館関係地方交付税についての要望は, 総務大臣, 文部科学大臣, 図書館議員連盟会長, 学校図書館議員連盟事務局長宛てに, 要望書を送付し, 各送付先に, 説明に伺うためのアポイントメ

ントを取っているところである。8月31日に, 文部科学省を訪問し, 要望を伝える予定である。

(2) 部会長・委員長会議の開催について

事務局長より, 資料に基づき説明があった。

開催通知を出し, 8月31日までの出欠確認を行っているところである。協会の課題について, 部会長・委員長各位に共通認識を持っていたくことが, 今回の部会長・委員長会議のテーマである。部会・委員会の活動についても2023年度の運営課題としている部分もあり, また, 研修事業等についても, 今後のあり方について, 委員会の皆様のご意見を伺いながら取り組んでいきたいと考えている。

理事長: 部会長・委員長の出席を増やすため, 今回は事前に日程調整した。部会長・委員長と, 業務執行理事の間の意思疎通を, 強固なものとしていきたい。

(3) 図書館総合展への出展及びフォーラムの開催について

事務局長より, 資料に基づき説明があった。

今年の総合展は, 会場開催が10月24日から25日, 会場はパシフィコ横浜である。今回の会場スペースはこれまでより若干狭く, 協会が予定している出展ブースは8㎡で, これまでの協会ブースの約半分のスペースである。出版物・グッズの販売, 協会の紹介パネル掲示等を予定している。フォーラムは, 総合展運営委員会と連携して開催の予定であり, 日

程は調整中である。内容は、「街の本屋さんを元気にして、日本の文化を守る議員連盟」の第一次提言を受け、書店と図書館との連携について、講演会を企画している。今年の全国図書館大会岩手大会の第11分科会（出版流通）のテーマ「地方における書店の役割と図書館」にもつながるようなフォーラムとしたい。

(4) 書店・図書館関係者及び文部科学省における対話の場の設置について

事務局長より説明があった。

対話の場に参加する委員が確定し、現在、委嘱手続きと、第1回目の開催日程の調整を始めている。第1回日は、9月最終週の開催を予定している。

理事長：書店側5名程度、図書館関係者側5名程度である。

(5) 学校図書館法70周年記念式典について

鈴木副理事長（以下「副理事長」という）より、資料に基づき説明があった。

2023年8月8日に、城西国際大学紀尾井町キャンパスにて、学校図書館法公布70周年記念式典が行われた。主催は、学校図書館法公布70周年記念事業運営委員会、文字・活字文化推進機構、学校図書館整備推進会議、全国学校図書館協議会であり、日本図書館協会からは、副理事長と曾木常務理事兼総務部長（以下「総務部長」という）が出席した。学校図書館部会からも出席した。

まず、文字・活字文化推進機構の山口寿一理事長による主催者挨拶があり、続いて、来賓として、文部科学副大臣の築和生氏、学校図書館議員連盟の塩谷立会長、城西国際大学学長による挨拶があった。さらに、

学校図書館議員連盟の笠浩史事務局長によるメッセージ（議連報告）の代読があり、その後、学校図書館改革の政策実現に向けた今後の活動について、運営委員会の設楽敬一事務局長より報告があった。

また、谷川俊太郎氏を委員長とする選考委員会によって選ばれた標語について、表彰式が行われ、さらに、記念講演として、東京大学大学院の酒井邦嘉教授による講演「対話型AI「チャットGPT」時代の学校図書館のあり方を考える」があった。最後に、記念式典名によるアピールが採択された。会場は満席に近く、参加者は100名ほどであった。

総務部長：記念講演をされた東京大学の酒井教授は、児童図書館員養成専門講座でも講師をしていただいたことがあるが、ChatGPTについては懐疑的で、文字や読書の重要性について語られている。

高橋：特に注目したいのはアピール文にも学校司書の配置については記載があるが司書教諭については記載がない。昨年末から続く学校図書館関係の研究集会や式典等の行事で、学校司書の配置・改善に関する言及はあるが、司書教諭については取り上げられていない。全国学校図書館協議会関東ブロック大会の研究集会でも同様であった。

(6) IFLA・2024世界図書館情報会議・年次大会開催地について

事務局長より報告があった。

前回の常任理事会で確認したとおり、IFLAは、IFLA World Library and Information Congress 2024 (IFLA世界図書館情報会議)（以下「WLIC2024」という）をドバイで開催することを決定していたが、これに対し数か国の会員から疑義があり、改めて

会員の投票を行うこととなり、本協会は「賛成」票を投じている。投票の結果、IFLA理事会は、WLIC2024のドバイ開催の決定を確認した、との報告があった。IFLA会員の37%による投票があり、反対票68%、賛成票27%であり、反対票は主に、ヨーロッパ、北アメリカ、ラテンアメリカ、カリブ海地域の会員によるものであった。一方、賛成票の多くは、アジア、オセアニア、中東、北アフリカ、サハラ以南のアフリカによるものであった。投票の結果は、あくまでも参考情報として理事会で確認したとのことである。

関根：8月23日にロッテルダムで開催されたIFLA総会では、WLIC2024会期中の総会開催について諮られた結果、否決され、ドバイ以外の場所またはオンラインで総会を開催する、との修正動議が可決されたとの情報を得ている。

5. その他

(1) 学校図書館職員調査について

高橋理事より、報告があった。

非正規雇用職員に関する委員会が行っている学校図書館職員調査について、調査は二通りあり、一つは、政令指定都市、県庁所在地の市、東京23区の教育委員会向けの調査であり、2023年6月下旬に調査票を送付し、7月末日までの回答とした。昨日8月24日の非正規雇用職員に関する委員会会議では、13の教育委員会が未回答とのことである。もう一つの調査は、学校司書個人向けの調査であり、Web上で回答できるよう、Googleフォームを活用したもので、昨日の非正規雇用職員に関する委員会会議で、調査項目の内容の大筋が出来上がったところである。非正規職員に関する調査だが、調査対象に

は正規職員も含む。

また、読売新聞は、昨年12月頃に学校図書費に関する調査を行っているが、このたび学校司書の雇用状況についても調査を実施しており、その調査対象は、非正規雇用職員に関する委員会による教育委員会向けの調査と類似している。異なるのは、市町村の教育委員会を選択的に含めている点である。回答締切は、非正規雇用職員に関する委員会の調査と同様、7月末日となっており、教育委員会によっては、学校図書館問題研究会の地域支部、日本図書館協会非正規雇用職員に関する委員会、読売新聞、の三つによる学校図書館職員調査に、回答している状況がある。

(2) 神奈川の図書館の集い2023について

高橋理事より、報告があった。

コロナ禍で開催されていなかった神奈川の図書館の集いを、今年は開催すべく、新しくなった神奈川県立図書館を会場に、図書館総合展の初日である10月24日の開催を企画している。

(3) 図書館関係地方交付税についての要望に関する学校図書館部会の見解について

高橋理事より、図書館関係地方交付税についての要望について、学校図書館部会からの見解の報告があった。

全国学校図書館協議会及び学校図書館関係団体による要望書では、司書教諭について一切触れていない。副理事長の説明は過去の事例であり、全国的には司書教諭として働きたいという例はまれであり、日本図書館協会の要望書では、学校司書に加えて司書教諭についても言及していることに、学校図書館部会としては納得がいかない。

*

*今後の予定

・2023年度通算第3回（定時第3回）理事会（オンライン併用）

日時：2023年9月28日（木）13時30分から

・2023年度第5回常任理事会（オンライン併用）

日時：2023年10月26日（木）14時から

・2023年度第6回常任理事会（オンライン併用）

日時：2023年11月22日（水）14時から

事務局カレンダー

*○印の日が事務局のお休みです。

■2023年10月

日	月	火	水	木	金	土
①	2	3	4	5	6	⑦
⑧	⑨	10	11	12	13	⑭
⑮	16	17	18	19	20	⑳
㉒	23	24	25	26	27	㉘
㉙	30	31	*	*	*	*

■2023年11月

日	月	火	水	木	金	土
*	*	*	1	2	③	④
⑤	6	7	8	9	10	⑪
⑫	13	14	15	16	17	⑮
⑮	20	21	22	㉓	24	㉕
㉖	27	28	29	30	*	*

※第109回全国図書館大会岩手大会が11月16日（木）、17日（金）に開催されます。



編集手帳

今月号は、「令和5年度（第109回）全国図書館大会岩手大会への招待」をお届けします。

第109回目の開催となる今大会は、4年ぶりの対面開催です。全国の図書館員が一堂に会する全国図書館大会をきっかけに、コロナ禍でリアルな交流が途絶えていた知人との再会を心待ちにしている方も多いのではないのでしょうか。

今大会の開催地である盛岡市は、The New York Times 紙が発表した

“52 Places to Go in 2023”（2023年に行くべき52か所）に選ばれたことから、今、世界的にも注目を集めている都市です。「歩いて回れる宝石的スポット」と評価された盛岡市の街並みを散策しながら、わんこそばや地酒を味わうことができるのも今大会の楽しみのひとつかもしれません。

今大会では、岩手県を代表する詩人・童話作家である宮沢賢治にちなんだ「理想郷“イーハトーブ”で本当の幸せを考えるー希望ある未来は図書館とともにー」というテーマの下、さまざまな企画が用意されています。記念講演では、国立天文台水沢 VLBI 観測所所長の本間希樹氏による「岩手発 ブラックホール行き 銀河鉄道の旅」が予定されています。歴史ある天文台で行われてい

る最先端の天文学研究の成果を知る貴重な機会になるでしょう。

さらに、館種・テーマごとに設定された各分科会は、いずれも興味深い企画になっています。戦争報道を見聞することが多い今日において、第7分科会の「戦争と図書館」というテーマは目を引きます。また、今なお復興に取り組む東北地方で、東日本大震災以後に得られた教訓を共有するとともに、今後の災害対策を考える第10分科会の企画はより学びが多いものになりそうです。

久しぶりの対面開催となる今大会が、多くの方々の人的交流を深める機会になることを願っています。ぜひ本誌をガイドブック代わりに、ご参加ください。

（宮原柔太郎）

図書館雑誌／11月号予告（Vol.117 No.11） 定価1026円 11月20日発行予定

特集：表現する図書館員—書くことのすすめ（仮題） 予定内容＝図書館員が書くということ—執筆のすすめ（呑海沙織）、現場で感じたモヤモヤを「見える化」して—認定司書オリジナル論文著作体験記（大江ひとみ）、医学図書館員として、興味を持って進めてきたこと（城山泰彦）、「小さな気付き」を大切に書いていくこと（伊藤民雄）、アジア経済研究所図書館の情報発信活動—資料月報からライブラリアン・コラムへ（坂井華奈子）、司書の仕事を書くこと（高田高史）。以上の特集のほか、日本図書館協会学校図書館部会第51回夏季研究集会報告（JLA 学校図書館部会）、〈れふあれんす三題噺⑨国際教養大学中嶋記念図書館〉生成 AI 時代のレファレンスサービスとは（相場洋子）、〈小規模図書館奮戦記⑨早稲田大学国際文学館（村上春樹ライブラリー）〉呼吸をはじめたライブラリー（高橋由里子）、〈声—各地の代議員から⑦〉（長田和彦、本山雅一）等の連載記事等を掲載してお届けします。